

# 中国共産党総書記時期における陳独秀

——「進化論」から史的唯物論へ——

菊池 一 隆

はじめに

現在、中国はアメリカに次ぐ世界第二の経済大国になり、その一挙手一投足は世界によくも悪くも大きなインパクトを与え続けている。中国国内にはチベット問題、新疆ウイグル問題、香港問題などを抱え、その強権的体制が批判の対象となっているのは周知の事実である。これらを考察する際、現状分析はもとより重要であるが、歴史を遡って、どのような経緯を辿って現在の中国共産党（以下、原則として中共と略称）体制が構築されたのか。その理念、政策、実態の継承と断絶は何か。それを考察、分析しようとすることは、あながち無駄とはいえない。今回は、その解明のための第一歩である。

本稿で取り扱う主要な歴史舞台は、アヘン戦争以降、イギリスを始めとする資本主義列強の侵略と抑圧によって思うように発展ができず、辛亥革命後を経て封建的母斑が濃厚に残る一九二〇年代の後進資本主義

国中国である。こうした状況を打開するにはどうすればよいのか。それと真正面から格闘したのが陳独秀であった。周知の如く、五・四時期、陳独秀は急進的な民主主義者であった。陳は「民主と科学」を旗じるしに中国の数千年来の精神文明、伝統に対抗して、何人も否定できずにいた儒教を徹底的に批判した。東洋の伝統精神文明が、専制政治を支える根源だと考えたからである。<sup>①</sup> こうして、陳は中国の民主化と中華民族の思想的啓蒙に大きな役割を果たした。

次いで、陳は、一九二二年中共創設の推進者となり、初代の党総書記というトップの要職に就き、「中国のレーニン」とまで称された。こうして第一次国内革命戦争時期（一九二二～二七年）、最大の権威と影響力をもっていったと思われる陳独秀が、①「右翼日和見主義」とのレッテルを貼られ、なぜ失脚しなければならなかったか。その必然性は何か。②陳独秀の歴史的位置をいかに規定すればよいのか。それらについて、主に第一次国内革命戦争時期の陳独秀の理論、政策を特に史的唯物論を軸に検討するのが、本稿のテーマである。中共史を理解するためには、「党史」の中で最初の段階である第一次国内革命戦争時期の分析が必要であり、その中で重要な役割を演じた陳独秀を正確に把握することなしには不可能である。

より具体的に言えば、第二次国内革命戦争期に陳独秀を失脚させた李立三が、今度は「極左日和見主義」として失脚したという事実を考える。当然のことながら、当時の中共指導部の陳独秀批判にゆきすぎがあったのではないかと疑問が生ずる。また、一般的に言われているように、「コミンテルンの正しい指導を陳独秀が、サボタージュしたために、第一次国内革命戦争の大敗北を喫した」のか否かを関連的に分析

する。これらの点が明らかになれば、陳独秀が、晩年「私の根本意見」という論文で、「民主性が官僚制の消毒をおこなわなければ、世界に残虐、貪欲、虚偽、欺瞞、腐敗、墮落のスターリン主義の官僚政権が実現するだけで、決していかなる社会主義も創造することができない」と強調し、ソ連でスターリン批判（一九五六年）が始まる一六年前にスターリンを激しく批判し、憤っている理由を正確に理解する手がかりを得ることができよう。

陳独秀関連書籍をみると、①一方は極端に陳を批判し、コミンテルンを過度に評価しているものがあると思うと、②他方は、陳を擁護しようとするあまり、欠点までも擁護し、コミンテルンを必要以上に批判するという傾向が見られる。前者①は、中国発表の文献<sup>③</sup>あるいは、藤井満洲男著『中国共産党五〇年略史』東方書店、一九七二年、並びに中西功著『中国革命と毛沢東思想』青木書店、一九六九年などにみられ、「陳独秀がコミンテルンの正しい指導を受け入れなかったから、中国共産党は潰滅的打撃を受けた」としている。ただし、藤井、中西の陳独秀評価は同じであるが、藤井が毛沢東を高く評価しているのに対し、中西は毛沢東を過小評価しているという違いがある。②は前者と比べて少数意見である。主にアメリカ発表の文献（例えば、B・I・シユウォルト著、石川忠雄等訳『中国共産党史』慶応通信、一九六四年、トロツキストのハロルド・B・アイザックス著、鹿島宗二郎訳『中国革命の悲劇』至誠堂、一九七一年）にみられ、日本では、石川忠雄著『中国共産党史研究』慶応通信、一九五九年があげられる。これらは、「第一次国内革命戦争の敗北の原因をコミンテルンの指導の欠陥にもとめ、陳独秀はその誤った指導を強制された」との見解をとる。

日本、中国、台湾の歴史学界では陳独秀研究で空白期があったが、一九九〇年代以降、陳独秀への興味、関心が回復し、関連書籍が断続的に出版されている<sup>④</sup>。本稿ではその流れの中で自らの見解を打ち出しておきたい。私は、陳独秀が一生をかけて時代、各思想と格闘しながら、自らの思想を形成していったと考え、その解明の一環として、本稿では中共総書記時期に焦点を当てる。具体的には、本稿の狙いは、陳が進化論、史的唯物論を梃子に思想、理論に斬り込み、その本質、実態を解明するところにある。

なお、私の陳独秀関連論文で公表したのは、①『国民会議』を巡る政治力学―一九二〇年代から三〇年代への連動―、狭間直樹編（京都大学人文科学研究所共同研究報告）『一九二〇年代の中国』汲古書院、一九九五年、②「中国トロツキー派の生成、動態、及びその主張―一九二七年から三四年を中心にして」、史学研究会『史林』第七九卷二号、一九九六年三月の二本だけである。本稿は、実は日本国中で学生運動が席巻していた一九七〇年以降、すなわち私が二〇歳台に執筆していたものである。その後、時に手をいれながらも実に半世紀寝かせてあった。どうしても史料、理論、内容的に満足できず、前記の二本の論文を先行的に発表した。今回、本稿がある程度、強化することによって紀要に出すことにした。まだ、不満足な点が多々あり、これをさらに充実させ、理論化し、陳独秀に関する著書の一章とすることを目指す。

### 一 中国共産党成立前の略歴と陳の思想的源泉「進化論」

陳独秀は、一八八〇年安徽省に生まれ、浙江求是書院卒業後、日本、

フランスに留学。清末、帰国して安徽高等学校教務長となった。辛亥革命（一九一一年）の時、安徽都督柏文蔚の秘書として革命に参加したが、第二革命の失敗によって上海にのがれた。一九一五年九月、『青年雑誌』（次号から『新青年』）を創刊。ついで沈尹黙の紹介で北京大学文学部部長となって、儒教批判、文学革命を展開し、新文化運動で中心的役割を果たした。この期間、西欧流の自由主義を信奉し、「民主と科学」を旗じるしとする急進的民主主義であった。五・四運動（特に、六・三運動）の時、プロレタリアートの威力をみて、マルクス主義に急激に傾斜していった。無論、マルクス主義を受け入れる基礎となつたのは、ロシア革命にあった。あくまでも民族主義の見地からではあつたが、ロシア革命がロシア皇族を革命したのみならず、世界君主主義、侵略主義を革命したということだ。私は、その成功を祝う<sup>5</sup>とあり、また、「一八世紀のフランスの政治革命と二〇世紀のロシアの社会革命は、ともに当代の人々から口を極めて非難をあげられた。だが後世の歴史家は、これら人類社会の変動と進化の一大転機とみなすだろう<sup>6</sup>」と論じる。いわば五・四運動によって急激にマルクス主義に傾斜していったのである。北京大学は新文化運動の中心であつたが、結局、一九一九年陳独秀は守旧派の排斥にあつて北京大学を追われ、その後、段祺瑞政府に逮捕された。二〇年末、ヴォイチンスキーの援助により中国社会主義青年団(S.Y.)を結成した。以上が中共創設まえの陳独秀の足取りである。

当時、中国の先進的思想界を風靡した理論は種々あるが、その代表的理論は「進化論」であつた。いうまでもなく陳独秀もマルクス主義者となる前に「進化論」を擁護し、推進した<sup>7</sup>。陳の論文には、いたる所に

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

「進化論」的思考があらわれる。例えば、「敬いて青年に告ぐ」では、「新陳代謝は、陳腐老朽なるものに時々刻々、自然淘汰の道を歩ませ、新鮮活発なるものに空間的位置および時間的生命を与える。人体が新陳代謝の道に従えば健康。陳腐老朽の細胞が人体に充満すれば、死。社会が新陳代謝の道に従えば、隆盛。陳腐老朽の分子が社会に充満すれば、社会は滅びる<sup>8</sup>」。そして、「世界の深化は、どんどん進んで止むことがない。……変化して共に進めないものは、生存競争についていけず、自然淘汰に帰着するにちがいない。それでも保守を唱えるつもりか！」と訴えた。

また、「抵抗力」では、「兼弱攻昧」（弱いものを従え、あまいな者を攻める）、「弱肉強食」は、中国の内外、古今をとわず一貫したものである<sup>10</sup>、とする。

このように、陳独秀は「進化論」から「弱肉強食」、「優勝劣敗」という思想を学んだ。このことは、とりもなおさず帝国主義が進化しているが故に勝利し、中国が劣っているが故に敗北するということになる。そこで、陳は、外国帝国主義の侵略を弾劾するよりも、むしろ中国の後進性を徹底して批判したのである。陳が力をこめたのは、中国の後進性の原因と考えた「中国の精神文明」を批判し、徹底的に破壊することによって、進化していると映った西欧流の「共和と科学」（「民主と科学」）を中国に植えつけることであつた。李大釗が現状における中国の革命性を楽観視したのとは逆に、陳は常に現存する中国の状況を嘆き、現状を徹底的に改造しようとした。このことによって、反封建闘争において封建制の思想的基礎である儒教批判において大きな成果を残したのである。逆に農民を正しく評価することができなかった。なぜなら、中国の

「無知」と「後進性」は、特に伝統にしばられた農民の中に見出されたからである。

陳独秀が、「敬いて青年に告ぐ」の中で書いている「陳腐老朽の分子」の多くを農民に置きかえることも可能だったわけである。それ故、陳は、その打倒されるべき伝統に汚染され、中国の落伍性を支えている農民が、中国を侵略している「進化」した帝国主義を打ち破り、中国に解放と独立をもたらすことに重要な役割を演ずるとは、到底考えることができなかった。このように「進化論」から生み出された農民軽視は、彼がマルクス主義者となった後も引き続き貫徹することになる。

結局、「進化論」は、中国の産業化によって農民がブルジョワジーとプロレタリアートに階級分解する未来に期待する以外になく、「二回革命論」の起源となった。また、「進化論」は、彼の一貫したプロレタリアート重視、農民軽視をもたらした。のみならず、同盟軍の問題が浮かびあがってきた時、農民よりも進化した階級としてブルジョワジーを相対的に高く評価させる理論的根拠となったのである。陳独秀は、「進化論」的発想から中国の特殊性をみぬくことができず、マルクス主義の史的唯物論を教条的に把握した。<sup>13)</sup>

## 二 「二回革命論」と史的唯物論

「二回革命論」とは、陳独秀の根底にあるといわれている理論で、陳の実行した政策面での批判点（例えば、農民問題、国民党問題）に大きくかわってくる重大な問題である。まず、「二回革命論」とは何かを明確におさえておく必要がある。一応、「二回革命論」を胡喬木の『中

国共産党の三〇年』で定義づけると、

「第一回目の革命では、ブルジョワジーにブルジョワ共和国をつくらせなければならず、プロレタリアートは、ただ、ブルジョワ共和国におけるすこしばかりの自由と権利が得られるだけで、その他にはなにも得ることはできないと考えた。だから、彼らは、ブルジョワ民衆主義革命においては、プロレタリアートは消極的に援助しうる地位にたちうるだけで、指導的地位にたつことはできないと考えた。彼らは、プロレタリアートはブルジョワ共和国が成立し、資本主義経済が一層発展してから、あらためてブルジョワ共和国を転覆し、プロレタリアート独裁をうちたてることによつてのみ、社会主義を実現できるものと考えた。これが二回目の革命である」、という理論とされる。<sup>14)</sup>

陳独秀は、果して「二回革命論」を唱えたのであろうか。唱えたとしたら、いかなる理由から主張したのであろうか。こうした問題が浮かび上がる。

### (一) 「二回革命論」の理論的基礎「史的唯物論」

「二回革命論」の理論的基礎となったのは、いうまでもなく史的唯物論、あるいはより正確に言えば、史的唯物論の公式的・教条的理解である。「二回革命論」を検討するために史的唯物論との関連を考えることから始めよう。マルクスの『経済学批判序言』によると、「社会の物質的諸力は、その発展のある段階でそれらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産関係とあるいは、その法律的表现にすぎないが、所有関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産力の発展形成からその桎梏に一変する。その時に社会革命の時期がはじまる」<sup>15)</sup>、となって



いる。

すなわち、「一定の生産関係のもとで生産力が伸び、その既存の生産関係が桎梏となった時、社会革命を行い、新しい生産関係ととりかえる」と要約できる。すなわち、まず「生産力の発展」、その後「社会革命」という定式が成立する。陳独秀の「ブルジョワ共和国の成立後、資本主義がより一層発展してから社会革命」という論理は、史的唯物論の「生産力がのび、新しい生産関係をになうプロレタリアートが、多数排出されてから社会革命をおこなう」という定式に従っていることがわかる。

ここで注意すべきことは、史的唯物論が大きくパラドックスによって構成されていることである。資本主義制を例にとると、客観的な生産力の発展の結果、資本主義を打倒するプロレタリアートが出現し、必然的に社会革命がおこなわれるとすもなかかわらず、あくまでも社会革命は人間の意識的行動によって達成されるのである。このように主観と客観によって形成されているということは、情況分析の際、「生産関係が、生産力の桎梏となるまでに達しているか」、「新しい生産関係を担う階級がそれを担えるだけの力量に達しているか」という命題を浮かび上がらせたとしても不思議ではない（傍点は筆者。以下、同じ）。あくまでも史的唯物論は歴史法則の典型を扱えたものであり、その公式に完全にのっとった国は、存在していなかったのである。マルクス自身、史的唯物論を「イギリスの発展過程」と「フランス革命」を組み合わせることによって構成した。その上、また、史的唯物論発表後の歴史は、社会主義革命は資本主義が高度に発展し、プロレタリアートが多数に排出されて革命的であるはずの西欧諸国から起こったのではなく、後進資本主義のロシアから起こったのである。すなわち、資本制が桎梏となるどこ

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

るか、資本制の生産力があまり伸びていない国で、社会主義革命は勃発したことを意味する。

史的唯物論内に内包するこうした矛盾は後のマルクス主義者に二つの傾向を生み出した。①一方は、ロシア革命の経験を重視し、社会主義革命を高く評価する傾向であり、②他方は、客観的自然史過程の重視である。①は第二次国内革命戦期の王明、及び李立三を代表とし、客観的情勢をほとんど分析することなしに、盲目的暴動という形式をとった。

②の客観的自然史過程の重視は言うまでもなく、陳独秀である。陳は「進化論」から、何の苦もなく生産力の発展＝歴史の発展をとり入れた。陳は「経済的にも文化的にも遅れた国々においては、弊害は資本主義の発展からくるのではなく、むしろその欠如からくる」と述べ、資本主義の生産関係がその生産力の桎梏となるまで伸ばすことが、プロレタリアートを多数生み出し、社会主義革命の達成を速めるという論点を打ち出したのである。このことは、客観的自然史過程を重視してはいるが、むしろマルクスの『経済学批判序言』に忠実な考え方であった。

一応、李大釗、毛沢東の考え方も対比して検討してみよう。李大釗は、「中国民族は侵略によってプロレタリア民族化した」と述べ、さまざま、国際共産主義運動の一環をになうことができると、主張した。つまり、純粋なプロレタリアートがあまり存在しなくとも、中国がプロレタリア革命をおこなえることを意味する。李大釗から大きな影響を受けている毛沢東は中国の現状を利用し、「プロレタリアートのヘゲモニー、農民を主力軍」とする方式を推進した。彼らは、陳独秀のように、プロレタリアートの大量出現（資本主義生産力の成長）を待つことをせずに現在、存在している階級の中で革命性をもっている階級を組織しつつ、

社会主義革命に転化できる革命を推進した。つまり、李大釗、毛沢東は労働運動、農民運動が高まりつつあるという具体的情勢の下で客観的自  
然史過程（生産力）より、社会革命（人間の主観的行動）を相対的に重  
視したのである。

（二）「一回革命論」から「二回革命論」への過渡期とその混迷<sup>(19)</sup>

陳独秀は、「進化論」から「史的唯物論」への転化の過渡期において  
は、「一回革命」的思考が強かったが、「二回革命」的発想ももち、前後  
一貫していなかった。それは、「進化論」自体が、「生産力の発展（＝経  
済基盤の変化）」によって自然に進化する」という理論を形成できると同  
時に、「優勝劣敗」から最も進化している社会主義勢力は必然的に勝利  
し、そのことは資本主義を通らず、社会主義へ至ることができるという  
「一回革命」の理論を形成することを可能にしたからである。しかし、  
彼は社会主義勢力をになうと考えていたプロレタリアートが、あまりに  
も少なすぎることから次第に「生産力発展による階級分化」に期待する  
傾向を強めていった。その混迷を具体的に説明しよう。

イギリスの著名な哲学者で平和運動家ラッセル(Bertrand Russell, 1872-  
1970) や張東蓀が「中国の不幸の根源は貧困と生産性の低いことにあ  
り、これは緩和させる工業化は資本主義だけがなしとげられる」と述べ  
たとして、それに対して陳独秀は、「進歩的な中国人は、あなた(ラッ  
セル)に失望している。……資本主義が好いものであるならば、中国の  
内外をとわず、歓迎されなくてはならない。……。もし好くないものな  
らば、中国の内外をとわず、反対しなければならぬ。我々は急いで資  
本主義を排斥すべきである。……中国の労働者のみが、中国のための独

立の目標を達成しようるのである。いわゆる民族資本家は、すべて直接、  
または間接に外国資本の買弁である」と述べ、最も進化した階級である  
中国労働者のみに期待し、ブルジョワジーへの不信を投げかけている。

また、教育、工業化の問題に関して、「ラッセル先生……中国は知識  
の面、物質の面では、ごらんのように発達していない。そこで中国を改  
造するためには、教育及び工業が重要なことは、すでに知っており、議  
論をまつまでのこともない。……しかし、討論しなければならぬこと  
が一つある。すなわち、今までのように資本主義を用いて教育、工業を  
発展させるか、もしくは社会主義を用いて発展させるかということであ  
る。私見では、資本主義が欧州・アメリカ・日本の教育、及び工業を発  
展させたかもしれないが、同時にこれらの国々を、卑しく不正でケチで  
良心のないものにしてしまった。幸いにも我々の中国は資本主義が未発  
達な段階で、教育と工業に着手しており、社会主義を用いて教育および  
工業を発展させ、欧米、日本の誤った道を歩まないのに丁度よい機会で  
ある」と述べている。すなわち、この時、陳は資本主義の誤った道を通  
らずに社会主義へ到達するという「一回革命」を指向していた。

にもかかわらず、「社会主義に関する討論」より少し前に書いた「国  
慶紀念的価値」においては、史的唯物論の客観的自然史過程重視の態度  
から資本主義段階を置かざるをえなくなり、「ロシアにおいては、共和  
制が封建制を転覆した半年後には、共和制は社会主義にとってかわられ  
た。このことは、封建制と社会主義の間に長い中間期を必要としない明  
白な証拠である」としている。だが、「二回革命論」として批判されて  
いる「ブルジョワ共和国が成立し、資本主義経済が一層発展してから、  
ブルジョワ共和国を転覆する」という、長期の資本主義発展の期間を依

然として肯定していない。

また、陳の「時局に対する私の見解」では、「社会党の立法と労働者の国家が、まだ成立していない時には、ブルジョワ階級の中の民主派の立法と政治は、社会の進化上、決して意義のないものではない。……もし、我党がブルジョワ階級の中の民主派と君主派の戦争に遭遇した場合は、前者を援助し、後者を攻撃しなければならない」として、社会主義国家成立前のブルジョワ共和国の意義を認めており、また、戦争、闘争の場合、相対的に進化しているグループを援助することを打ち出している。

このことは、反帝反封建闘争の場合、国民党と合作できる理論ともなりえた。「關於社会主義的討論」で、完全に資本主義排斥であったのが、反封建闘争ではそれを支持する可能性が論理的に出てきたわけである。

陳独秀は、このように「一回革命論」と「二回革命論」的傾向の間を動揺したが、「進化論」の「弱肉強食」、「優勝劣敗」から導びき出された優れた強くなるべき新しい階級（プロレタリア勢力）が、帝国主義・封建主義を今すぐ、打倒する主力軍になるほどに成長していないことに気づかざるをえなかった。それ故、陳独秀は、産業化によって生じるブルジョワジーとプロレタリアートの階級分解に期待する生産力重視の「二回革命論」への傾向を強めていったのである。

陳独秀が、進化論的に史的唯物論を把握したこと、すなわち、人的役割軽視は、次の文章に明らかに示されている。「鄭賢宗に答える」で「社会の進化において、物質の自然傾向の勢力は非常に大きく、社会を改造しようとしている者は、決してこのような客観的傾向を無視することはできない」と述べ、客観的傾向を重視した。また、「蔡和森に答える」では、「唯物史観は、もとより自然進化の意義を含んでいるが、し

かしその意義は決してそれだけではなく、唯物史観の意義は歴史上の一切の制度の変化が、経済制度の変化にしたがって変化するということを我々に教えていることである。我々はこの要旨によって、将来の歴史をつくり出す上で三つの教訓をえた。①ある経済制度が崩壊する時、……人力でおしとどめることはできない。②社会改造を主張する時、現社会の経済事実を無視することはできない。③社会改造は、まず経済制度から着手しなければならない」と述べている。

つまり陳は「進化論」の自然進化から史的唯物論の客観的自然史過程の一面を強く受け入れた。その客観的自然史過程を推進するものは、経済の変化であるとしているのである。しかし、上部構造の反作用、作用が土台（経済）に及ぼす影響への考察が抜けおち、人的役割、すなわち、社会革命を軽視することになる。こうした理論に基づいて「二回革命論」の発想は弱まっていき、「社会の自然進化」、「経済変化」の重視は、とりもなおさず「二回革命論」の骨幹を形成することになるのである。

### （三）「二回革命論」の確立

第一次国内革命戦争期、すなわち陳独秀が、中国共産党内で大きな役割を果たしていた時、「二回革命論」は、彼の一貫した理論となっていた。

「人類社会、組織の歴史的進化について、過去、現在から将来を推測すると、その最大の変革は遊牧酋長時代から封建時代それからブルジョワ時代へ。そしてプロレタリア時代へ。さらにそれから無階級時代へと推移することである。……これは人力で如何ともし難いものである」と客観的自然史過程を述べ、「労働者階級の階級覚醒は、産業の発達、

階級の分化に伴って発生し、強烈化するものであつて、人力による提唱で生まれるものでなければ、人力の否認によつて紊乱させ消滅させうるものでもない」とし、歴史の客観的法則を重視し、人間の主観的役割を軽視している。極論すれば、中国革命の特徴をなす、例えば、彭湃のように「大衆の中へ」入つて啓蒙、説得したり、組織化に努力しなくとも、産業化が進展すれば、必然的に労働者の階級の覚醒が高まり、革命が成功するという論理になる。この論理に従えば、産業化を推進する方が大衆を説得、組織化するより、プロレタリア革命が近くなるということになりかねないのである。

陳独秀は、「プロレタリアートとしてもこの種の民主主義革命の成功が、はつきりとブルジョワジーの勝利であることは明らかに知っているが、幼稚なプロレタリアートとしては目下のところ、こうした勝利の闘いの中でこそ、はじめて若干の自由を獲得し、かつ自己の能力を拡大する機会を促すことができるのである。従つて革命的ブルジョワジーと提携することも、また、中国のプロレタリアートにとつて当面、必らず通らなければならぬ道である」とした。<sup>(28)</sup> また、「我々はユートピア（空想）的社会主义者ではないから、資本主義を経過しないで半封建社会から一挙に社会主义社会に入ろうなどと幻想することは決してない」と述べ、明白に「二回革命論」として批判されている論点を出している。まず民主主義革命の勝利は、ブルジョワジーの勝利と規定し、その中でプロレタリアートは若干の自由を獲得できるとした。こうして、陳独秀は、明確に、資本主義段階を肯定した。しかし、彼は胡喬木の批判のように「プロレタリアートは、消極的に援助しうる地位にたちうるだけ」とは考えていなかった。陳独秀が「革命的ブルジョワジーと提携する」

といっているのは、あくまでも同等な立場での党外連合であり、むしろ積極の意味をもつていたのである。

### 三 「国民党内国共合作」

第一次国共合作、すなわち「国民党内国共合作」は中共の組織、勢力を急速に伸長させることを可能にした政策であつた。最後に国民党に裏切られ、大きな打撃を受けたが、統一戦線（中国革命の勝利の要因）の最初の試みとしても大きな価値をもっている。

中共が最初に出した「決議」では、「現存諸政策に対しては、独立性、攻撃および排他的態度がとられるべきである。……我党はプロレタリアートのためにたちあがり、他の政党、団体とはいかなる関係ももつべきではない」とし、極めて柔軟性がなく、効果的な戦術、戦略をもたないものであり、統一戦線を真つ向から否定する内容であつた。陳独秀が、この決議にどれだけ寄与したかは明らかでないが、一回革命的発想を残している時期でもあり、積極的に反対しなかつたものと思われる。

これが二回大会（一九二七年七月）になると、「プロレタリアートが民主主義革命を援助するのは……封建制度がその生命をひきのばさないために、プロレタリアートが真の力を養成するために必要な段取りである。……民主連合戦線の中にあつて、少なくとも小ブルジョワジーの付属物となるのではなく、自分自身の階級利益のために戦わなくてはならない」とし、第一回大会の排他的態度が改められ、民主主義革命における連合戦線政策が採択された。この変化は、レーニンの「民族及び植民地問題委員会の報告」（後述）が関係していることは明らかである。陳



独秀としても連合戦線政策は極めて受け入れ易い政策であった。前述したように陳は「対於時局的我見」で「我党がブルジョワ階級の中の民主派と君主派の戦争に遭遇した時、前者を援助し、後者を攻撃しなければならぬ」といつていることからわかる。この思考を延長させると、帝国主義と封建主義が主要な敵の時期においては、当然、中国のブルジョワ階級を援助し提携することになる。

また、陳独秀は連合戦線政策を受け入れた理由として、「中国の産業発達が階級を成長させ、はつきりと分化させるまでには至っておらず、従ってプロレタリアート革命の時期は成熟しておらず、ただ両階級連合の国民革命の時期が成熟しているにすぎない<sup>(32)</sup>」としている。陳は、連合戦線を自己の思想と合致させ、肯定している。しかし、「両階級連合」とはあくまでも党外連合であり、「国民党内合作」ではなかった。

だが、コミンテルンが、次に打ち出した政策は、予想外の「国民党への加入」であり、国民党内での国共合作であった。もちろん、この政策は陳独秀をはじめとする中国共産党から反発を受けることになる。陳独秀が中共を除名された後、「全党の同志に告げる書」で暴露したことによると、

「コミンテルン代表マーリンを中国に派遣し……国民党組織に加入することを提案し……プロレタリアートはこの党に加入し、この党を改造して革命をおしすすめるべきであると力説した。当時の中共中央の五人の委員である李守常、張特立、蔡和森、高君宇と私は、みな一致してこの提案に反対した。その主な理由は、党内連合は階級組織をごちゃごちゃにし、われわれの独自の政策を牽制するということがあった<sup>(33)</sup>。また、「ヴォイチンスキーへの手紙」で「国民党加入」の提案に対して、

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

「われわれは断固反対である。……何故なら、中国共産党と国民党では革命の目標と基盤が全くちがっている<sup>(34)</sup>」との書簡を送っていることから裏づけられる。

## （二）国共合作の原点——レーニン

陳独秀が「国民党外合作」から「国民党内合作」に改めたのは、後述することにして、まず国共合作を明確に把握するために、国共合作の原点にたしかえる必要がある。その原点はレーニンであった。一九二〇年七月レーニンはコミンテルン第二回大会で『民族及び植民地問題委員会の報告』をしている。

第一に、「植民地の住民の大部分はブルジョワ的な資本主義諸関係の代表者である農民からなっているために一切の民族運動はブルジョワ民主主義でしかありえない<sup>(35)</sup>」。これを前提に「共産主義インターナショナルは植民地や後進国のブルジョワ民主主義と一時的な同盟を結んで進まなければならない。しかし、ブルジョワ民主主義とけあってしまうべきではなく、プロレタリア運動がたとえ芽ばえの形態であろうとも、その独自性を絶対に維持しなくてはならない<sup>(36)</sup>」と述べ、国共合作の可能性を与えた。だが、この段階には、あくまでも国民党外国共合作であって、それによって独自性を維持すべきと考えていたと思われる。

第二に、ブルジョワ民主主義運動との同盟の意義を次のように論じる。

「共産主義インターナショナルは植民地と後進諸国のブルジョワ民主主義運動を支持しなければならないが、それはすべて後進諸国で将来のプロレタリアート政党の要素の集団をつくり、彼ら自身の任務、すなわ

ち、その民族内のブルジョワ民主主義運動と闘争する任務を意識するように教育されることをもつぱらの条件としている<sup>(37)</sup>のである。

これを中国にあてはめると、「国民党」を支持し、国民党や農民と一時的同盟を結び、反帝反封建のブルジョワ民主主義革命の過程で、プロレタリア政党を強大にする。それと同時に、そのブルジョワ民主主義革命の中で、将来ブルジョワジー及び農民のブルジョワ的要素と闘争する任務を自覚するように教育する。これが、中国革命に対するコミンテルン路線の骨幹となる。そのことは、とりもおおざずコミンテルン指導下で中共がおし進めたやり方の骨幹となることを意味するのである。

第三に、レーニンは「一回革命論」を唱えていた。

「共産主義インターナショナルは、先進諸国のプロレタリアートの援助によって後進諸国は資本主義発展段階を素通りしてソビエト制度に移行することができるという命題を確立し、それを理論的に基礎づけなければならぬ。そのための手段を前もってしめすことは不可能である。実践による経験がそれを我々に教えてくれる<sup>(38)</sup>」とし、以前、「社会主義は二重の意味で民主主義なしには不可能である<sup>(39)</sup>」、「共産主義は資本主義から発生するものであり、歴史的に資本主義から発展するものであり、資本主義によって生み出された社会勢力の作用の結果である<sup>(40)</sup>」。「中国では資本主義を『予防する』ことができる、中国ではこの国がたち遅れているために『社会革命』を一層たやすくできるなどという夢想は全く反動的だからである<sup>(41)</sup>」と述べていた。このように、資本主義段階を通らねば、社会主義へ至らないという「二回革命論」を唱えていた。中国においても、資本主義が必要としていたのを、何故、「一回革命論」に転換したのか。

これは、ロシア革命の成功による自信、ロシアにソビエト政権が確立したことによる情勢変化、「半植民地の特殊性」(プロレタリアートも弱い)、ブルジョワジーも弱体など) 西欧労働者の援助などを利用して、何らかの「手段」を用いて「資本主義を素通り」できると考えたのである。中国の場合、その「実践による経験」から導びき出された「手段」として採用されたのが、後に毛沢東らが指導するプロレタリアート(實質的にプロレタリアート意識をもつに至ったとされる中共) がヘゲモニーをもち、農民を主力軍とする形態であった。そして、民主主義革命を徹底的にやることによって社会主義革命に転化させるといふ新民主主義革命路線だったのである。

第四は、ソビエトについてである。

「農民ソビエト、被搾取者ソビエトが資本主義諸国にとっても有用なだけでなく、前資本主義的諸関係をもつ諸国にとっても有用な手段である<sup>(42)</sup>」とし、後進国においても高くソビエトを評価した。また、ソビエトに関して『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』では「ブルジョワジーが民主主義革命の先頭にたつて革命に不徹底な利己的な性格を与える」のを防ぐには「プロレタリアートと農民の革命的民主主義独裁(ソビエト) 以外の手段はない<sup>(43)</sup>」とし、ブルジョワジーをチェックし、プロレタリアートの独自性を保つための手段としてその役割を高く評価していた。つまり、レーニンの思考の延長上におけるブルジョワジーとの同盟は、あくまでもソビエトを基礎とした上での同盟指向でロッキーマンの方がむしろ、その点では、レーニン路線を踏襲したことは明白である(後述)。

(二) 陳独秀は当初「国民党内国共合作」に反対していたにもかかわらず、なぜ転換したのか。

第一にあげられるのは、当然、コミンテルン路線が「国民党への加入」を強力に推し進める路線であったことにある。一九二一年（民国一〇年）に、中共黨員は初めてコミンテルンの招集した極東勤労人民大会に直接参加した。その大会で、「後進諸国」（開發途上国）では「ブルジョワ」民主主義革命をおこなうことが決議された。そのことによつて第一回大会の排他的態度が改められ、第二回大会（一九二二年）で民主主義革命の連合戦線政策（＝国民党外国共合作）が採択された。ところが、孫文は大政党的国民党と小政党的の中共を対等とする国民党外国共合作を認めず、中共黨員が国民党に加入し、国民党の規律に従う条件によつてのみ、協力して民主主義革命をおこなうと主張した。その結果、コミンテルンは、中共黨員が国民党に加入し、この党を改造しながら革命をおこなうことを決定し、マリーングを中国へ派遣し、国民党へ加入することを勧告させた。陳独秀としては、中共がコミンテルンの中国支部であるとの認識と、ソ連が社会主義革命の成功者として絶対的権威を有していることから抗しきれず、動揺しながらも勧告に従わざるをえなかつたものとみなせる。

第二に、一九二三年二月七日の呉佩孚による京漢鉄道の労働者惨殺（二・七惨案）で打撃を受け、プロレタリアートだけでは革命をおこなうことができないという認識をもつに至つたことである。陳独秀は「統一的な国民運動をおこなつて自由と民権をかちとろうとする全国の革命階級、各党派、各分野の諸勢力を、一つの統一的な目標のもとに団結させ、組織化された広汎な国民運動化させなければならない」とし、

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

それをなすためには、何よりもまず「民主革命的国民党の周囲に結集し、それを強力な革命党たらしむるべきであり、このようにしてこそ、軍閥打倒の希望がもてる」と述べている。<sup>43</sup>つまり、主要な敵は、呉佩孚をはじめとする軍閥であり、これを打倒するためには、国民党と力を合せなければならない。国民党が「国民党外合作」に反対している以上、中共に残されている道は、「国民党内合作」しかないのである。

第三に、第二と少しかかわりがあるが、当面、反帝反封建闘争が何よりも重要という認識に立つたことである。陳独秀は、「半植民地に陥り、しかも完全な植民地化の悲運に瀕している中国人は、まず列強、軍閥の二重の屈辱から解放されなければならない。その他のことは問題にしようがない」とし、<sup>44</sup>中国革命は「反帝反封建の国民革命」であり、「反帝反封建闘争」が中国にとつてあまりに緊急な問題であり、その他の「党内合作」か「党外合作」かという問題に時間をかける余裕がないと考へたのである。その基礎には、「ブルジョワジーとプロレタリアートは、まだはっきりと分離していない」<sup>45</sup>ので、激烈な階級闘争はおこりえず、同じ政党を二階級で構成することが可能との考へがあつた。さらに彼が最も危惧したことは、打倒した軍閥復活の可能性であつた。陳は「ブルジョワ民主主義革命が、もしブルジョワジーの援助を失つたならば、革命事業には、階級的意義も、社会的基礎もないことになる。たとえ、現在の支配階級を打倒したとしても……打倒された階級が復活する可能性が常に存在する」とし、<sup>46</sup>軍閥の復活を防ぐ暫定的な支配階級として国民党を支持したことがわかる。

第四に、陳独秀自身の理論が、「国民党内国共合作」を受け入れを容易にした。すなわち、「国民党内国共合作」を基礎に国民革命運動をお

こなつていく過程で中国の産業化は進展し、農民層の階級分解がおこなわれる。そこから生み出されたプロレタリアートは産業化にしたがって必然的に階級自覚を強め、国民党より優位になっていくとの展望をもつことを可能にした。陳が「労働者階級を国民革命の連合戦線に参加させることは、階級性を混乱させ、改良妥協の傾向を生み易く、一つの危険な方法といえよう。しかし、このような考え方は、多少ひよわで幼稚な考えだといわざるをえない。労働者階級の覚醒は産業発達、階級分化によつて発生し、強化するもので人力による提唱で生まれるものではない」と述べている。このことは、その明白な表われといえよう。確かに「連合戦線」（党外連合）をとりあげているが、この理論は、そのまま「国民党内国共合作」を推進する理論に置き換えることが可能である。

### (三) コミンテルン路線と陳独秀

さて国民党内国共合作までの簡単な経過をみると、前述の如くブルジョワジーと農民との同盟、協力を打ち出したのはレーニンであった。だが、その後、「国民党外合作」か「国民党内合作」かで、コミンテルン内部でも激論がたたかわされた。一九二二年一月二月コミンテルンは「国民党への加入」を決定し、それを基礎に反帝反封建の統一戦線を構築することを提案した。一九二三年六月三全大会で中共は、コミンテルンのこの「国民党内国共合作」の方針を受け入れ、一九二四年一月に実現した。以上が簡単な経過である。

一九二三年一月コミンテルン執行委員会は、「国民党に対する中国共産党の態度に関する決議」で、「国民党は唯一の重要な民族革命集団で

ある」(A) という前提の下に、「国内の自立的労働運動が、まだ弱いので、帝国主義者と国内におけるその代弁者に対する民族革命が中国の中心課題である」(B) とし、「労働者階級が、完全に独立した社会階級として、まだ十分に分化していない」(C) 限りは、……中国共産党員が国民党に留まるのが適当である」とした。ただし、その際、「中国共産党員は、独自の旗をおろしてはならない」(D)。このように、コミンテルンは、(中共党員は) 国民党内において独自性を保ち、国民党を革新化させるという巧妙な「国民党内国共合作」を明確にうち出したのである。

それに対して、陳独秀はどのように呼応したであろうか。陳は「中国国民革命与社会各階級」で、「中国革命」が、「国民革命」であり、「国民革命の目標は、反帝反封建のブルジョワ民主主義革命」(B) であると定義づけた後で、「国民党が、中国史上、ブルジョワ民主主義革命を遂行する使命を負っていることを明確に自覚すべきである」(A) と述べ、さらに「ごく少数の自覚した労働者は質の上で極めてすぐれているが、他の労働者は質の上でも数の上でも皆、幼稚であり、それ故に、一つの独立した革命勢力になりえない」(C) としている。また、コミンテルンの「独自の旗をおろすな」という指示に対しては、労働者階級が「独自の組織をもちさえすれば……勇敢に国民革命の複雑な闘争に参加することは、労働者階級の利益となつても、決して危険とはならない」(D) と呼応している。

このように、陳独秀はコミンテルンの路線をほぼ踏襲した。だが、前述したように、当初陳にとって「国民党内国共合作」は理解をこえるものだった。状況分析と外部的圧力を主な原因として彼は「国民党内国共



「合作」を受け入れざるを得なかったが、「産業化による階級分化と階級自覚の覚醒」を重視（無論、そうした傾向が全くなかったわけではない）する方向で、すなわち「客観的自然史過程」による社会経済重視の傾向を更に強めることで、「国民党内国共合作」の理論的な正当化を試みた。陳は、このコミンテルンの決議が出された三ヵ月後には、「二回革命論」の立場から「国民党内国共合作」を理論的に正当化し、また、それによって「二回革命論」を更に強固なものとして推進することになるのである。

ここで、藤井満洲雄の『中国共産党五十年略史』における陳独秀批判を検討してみよう。それによれば、陳独秀は、「一九二三年六月、三全大会でいわゆる『二回革命論』をとき」、「当面の一切の活動は国民党に帰すべきであり、プロレタリアートとその党は、革命的統一戦線における独自性と指導権を堅持すべきではない」と主張した<sup>50</sup>、と書かれている。確かに陳独秀の文献から推察すると、経済発展の重視から「二回革命論」を説く可能性はあった。また、三全大会の決議に「国民党のヘゲモニー」をうたっていることから、陳独秀が「国民党のヘゲモニー」を唱え、「中国共産党は、国民党を援助する」ことを主張することもありうる。だが、「一切の活動を国民党に帰すべきである」と主張したとは考えにくい。

また、『独自性を堅持すべきでない』と主張した<sup>51</sup>となつてはいるが、陳独秀は、「独自の組織」の独自性を保つ手段として、労働組合、農民組合の伸長に努力したのである。したがって、「独自性」自体を否定することはありえない。ただし「プロレタリアートのヘゲモニー」については、言わなかったであろう。このことについては、後で詳述するが、

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

コミンテルン路線によって、この時期は「独自性」を確保する時期であり、「ヘゲモニーを得るための準備期間」と定義づけられている。この時期に「プロレタリアートのヘゲモニー」を唱えることは、「国民党内国共合作」による成果を得る前に空中分解する可能性があった。藤井によれば「陳独秀は中国共産党成立から一貫して、中国の労働者は数も少なく、幼稚であり、独立した革命勢ではない……と考えていた」と書かれている。このことは、その通りであるが、「独立した革命勢力ではない」というのは、あくまでも、コミンテルンの決議に呼応したものであることを押さえておく必要がある。

#### （四）ソビエト問題

レーニンの前述した「報告」、「原案」の重要な論点で、詳しく言及しなかったものにソビエト問題がある。これは、陳独秀、彭述之などが除名された際、問題となった位で、コミンテルン主流（スターリン路線）ののつとつていた中共にとってほとんど問題になりえなかった。レーニンは、前述したように「ブルジョワ民主主義」との同盟を述べた後で、「農民ソビエト、被搾取者ソビエトは……前資本主義的諸関係をもつ諸国にとつても有用である」とし、ソビエトを形成しつつ、ブルジョワジーとの同盟を指向した。

では、このレーニンの見解に対してスターリン、トロツキーはどうであったか。

スターリンは、「ソビエトは、民主主義革命からプロレタリア革命にうつるとき、必要であり、現存、ソビエトをつくることは、革命の国民党段階をとりこえたことになり<sup>52</sup>」、二重権力を形成するとして否定し

た。こうした理論は、「国民党内国共合作」の中で、プロレタリアート勢力を伸長させるという理論の基礎となったが、同時にレーニンの言った「独自性」を保つための手段として、「ソビエト」を放棄したことを意味し、スターリンの場合、「独自性」を唱えつつも、その手段が極めて不明確であった。

これに対してトロツキーの意見を「中国問題に関する第一の演説」、「中国問題に関する第二の演説」<sup>(33)</sup>を参考に考察すると、①国民党との同盟はソビエトを基礎として深化、拡大させる。②中国ブルジョワ民主主義革命はソビエト形態において前進し、勝利できる。③中国はブルジョワジーが弱いので、プロレタリアートがヘゲモニーをとり易いということになる。これはレーニンの見解に近い。

最後にソビエト問題ともからめて、「国民党内国共合作」の若干の意義と限界を考えてみよう。「国民党内国共合作」は、中共が自ら望んでおこなったのではなく、むしろ、コミンテルンの指示と状況の変化によつて採用せざるを得なかった政策であった。だが、「国民党内国共合作」は、中共に極めて有利に働いたという事実を見のがすことはできない。

コミンテルンは中共の弱い初期の状況の下での国民革命において、ある程度、革命的な国民党を、外部からコミンテルンが援助し、内部からは中共が支援する方針として打ち出した。これによつて国民党が強大化するにつれて、中共も勢力を拡大することに成功したし、さらに一定期間、「反帝反封建」のスローガンの下で国民党を革命側にひきつけておくことも可能にした。もしも、この段階でソビエトを創出したならば、例えば、党外合作を指向したとしても、孫文の言から予想されるように

国民党の大きな反抗をよびおこしたであろうことは疑い得ない。換言すれば、中共は帝国主義、封建主義を敵とすると同時に、国民党までも敵にまわす可能性が生じた。中共は、国民党との敵対において消耗し、弱体化することになった。強力な帝国主義と軍閥の二重抑圧から中国を解放するためには、初期の中共にとつて国民党と強く結びつくことによつてのみ、効果ある闘争を組むことが可能だったのである。確かに国民党の枠内における中共の政策は、単独のときより妥協的な傾向をもつ政策とならざるを得なかった。しかし、それ以上に国民党は、国民党内に存在する中共黨員の大きな影響を無視することができなかった。そのことは、国民党から中共黨員が自ら望んで脱退したのではなく、「国民党への加入」を継続しようとする中共に対して四・一二クーデタ、「汪精衛の裏切り」によつて、独自の軍隊をもたない中共黨員を武力で駆逐したことに明白に表われている。また、四・一二クーデタと「汪精衛の裏切り」は、中共が「国民党内国共合作」という方策により国民党のヘゲモニー、存立をも脅びやかすほどに成長し、必然的にヘゲモニーをどちらかがとるかという闘争にまで発展させたことを意味するのである。

限界についても若干述べておきたい。すなわち、中共、もしくはコミンテルンは、「国民党内国共合作」をおこなっている過程において、労働者階級に「革命的精神」と「階級的自覚」を認識させ、高揚させることを狙った。だが、国民党に対する過大評価から十分おこなえなかった面もある。「国民党内国共合作」を通して次第に内部から共産化することを目的に、国民党内の急進主義者を中共に吸収しようとしたり、国民党左派を強力に中共側にひきつける努力をした。だが、十分に達成できなかった。さらに中共独自の武力を軽視し、労働者、農民に対する宣伝

と労農組織の拡大、権力の内部からの段階的な把握を狙っている期間に北伐が急速に進展した。その結果、一九二七年三月に国民革命軍が上海を占領し、長江以南を手中に収め、蒋介石が自らの基礎を築いてしまうまで、なんらの有効な手を打てなかった。結局、コミンテルンと陳独秀の政策の誤りは統一戦線の合作面を過度に重視し、その内部でのヘゲモニー獲得、組織拡大に努力したが、統一戦線における階級矛盾と武装問題を正確に処理できなかったことに帰結する。<sup>(53)</sup>

#### 四 スターリン演説「中国革命の見通しについて」の意義と限界

一九二六年一〇月、スターリンはコミンテルン執行委員会第七回拡大総会で「中国革命の見通しについて」（以下、原則として「見通し」と略称）という演説をおこなった。<sup>(54)</sup> 胡喬木はこの演説に対して高い評価を与え、当時の陳独秀を代表とする中共指導者たちを批判し、次のように書いている。

「同志スターリンは、すでに……『中国革命の見通しについて』という有名な演説のなかで……中国革命におけるほんとうの革命的軍隊のこともつ重要さ、共産党が軍事を研究し軍隊を掌握することの極度の重要さ、農村革命を展開し農民の要求を満足させることの極度の重要さ、プロレタリアートが革命の指導権をにぎることの極度の重要さを指摘した。……もしも同志スターリンとコミンテルンのこれらの貴重な意見が、中国共産党員の指導者たちを適時に目ざめさせていたならば、敵は何としても革命を一拳に打ち破ることはできなかつたであろう」<sup>(55)</sup>、と。

果して陳独秀の「右翼日和見主義」グループはこれらの要求を受け入

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

れなかつたため、<sup>(56)</sup> 一拳に敵を打ち破られたのであろうか。これらを解明するために、まずスターリンの理論を検討しなければならない。一九二七年八月スターリンはソ連共産党中央委員会での演説「国際情勢とソ連同盟の防衛」の中で中国革命を三段階に分けている。これを整理すると次のようになる。

【第一段階】全民族連合戦線の革命であり、打撃をおもに外国帝国主義のむける。民族、ブルジョワ、プロレタリアートの革命運動を支持している。この時期における統一戦線は、共産党が独立した政治的、組織的活動をおこない……プロレタリアートのヘゲモニーのための条件を準備するのである。時期は、主に広州時代（一九二二年六月三全大会から一九二六年七月北伐戦争開始頃まで）。

【第二段階】ブルジョワ民主主義革命段階であり、民族、ブルジョワ、プロレタリアートの革命政策に移る。土地（革命）運動が始まる。この時期の始めに「中国革命の見通しについて」が出され、プロレタリアートのヘゲモニーが唱えられる（二六年一〇月演説「中国革命の見通しについて」から武漢政府時代）。

【第三段階】ソビエト革命であり、将来やってくるであろう。<sup>(57)</sup> つまり「中国革命の見通しについて」が出される前は、「プロレタリアートのヘゲモニー」の準備期間であり、中共の独自性を確保する期間として重要であった。すなわち、「見通し」が出される前においては、陳のみが「プロレタリアートのヘゲモニー」問題で責められる必要はない。

では、「見通し」以前におけるスターリン、コミンテルン路線と陳独秀の情況分析の差について論を進めたい。

陳独秀は、一九二四年二月「民族運動の二十七年——その教訓——」という論文で、「二〇年余りの民族運動が我々に与えている教訓は、次の点にある。あらゆる社会階級の中で、人類の歴史における最後の階級であるプロレタリアートだけが、最も徹底した革命的階級であり、また国際資本主義と帝国主義とに對する本来の敵対者である」。「プロレタリアートは、資本主義国家の主たる原動力であるだけではない。プロレタリアートだけが最も徹底した革命階級であり、また国際資本主義と帝国主義に對する本来の敵対者である」と述べた上で、「プロレタリアートは、あらゆる同盟者に影響を与えて、帝国主義者及びその手先に對して、妥協のない攻撃を与えることによつて、その社会革命のヘゲモニーを獲得する。それが国民革命——民族解放の眞の道を達成する唯一の道である」とし、「見通し」の出る二年前にすでに「プロレタリアートのヘゲモニー」を唱えている。

しかし、これはコミンテルン路線の第一段階において「プロレタリアートのヘゲモニー」を唱えていることを意味し、「プロレタリアートの独自性」、「プロレタリアートのヘゲモニーの準備期間」とするスターリンの理論と衝突し、結局、コミンテルンの絶対的權威に抗する理論的根拠をもたぬまま、ひっこめることになる。その結果、中国共産党四全大会では、統一戦線活動に表れた左翼的偏向と右翼的偏向を批判し、「国民党内国共合作」を肯定し、その中で中共の独自性を強調することになるのである。

次に五・三〇運動に際し、中国のブルジョワジーの動揺性、妥協性、多動性が明白になった時、ブルジョワジーが同盟軍たりうる価値があるかどうか再び問題となった。陳独秀は五・三〇運動によって「植民

地、半植民地のブルジョワジーは革命をしない」という公理が実証されたとして、「資本主義はすでに最後の段階にまで発展し、臨終に瀕している。それ故に、いまや全世界のブルジョワジーは、すべて革命される側にあつて反動化するに至つた。幼稚な中国のブルジョワジーは、原則的には、帝国主義と国内軍閥の二重の圧迫下にある以上、革命の要求もつてはいるはずである。しかし、実際には、彼らはすでに全世界の反動的ブルジョワジーの一部にすぎず、彼らが当然もつていべき革命的要求は、彼らの反動性によつて、いともたやすくうち消されてしまうのである」と、と激しい口調で書き、ブルジョワジーに對する極度の不信感を露わにした。

そして、陳独秀は失脚後、五・三〇運動の際、すでに国共分離を主張したことを明らかにし、「載季陶の（反共）パンフレットは、……まさしく、ブルジョワジーが自己の階級勢力をうちかためることによつて、プロレタリアートを抑制し、進んで反動化の方向に向おうとしているあらゆるわれであり、われわれは、ただちに国民党を脱退して独立するよう準備すべきであり、そうしてこそ、自己の政治的面目を保ち、大衆を指導することができるし、国民党の政策に牽制されずにすむ……と主張したが……コミンテルンの規律と（中共）中央の多数意見を尊重するため自己の提案を堅持することができなかつた」と書いている。

国共分離（国民党からの脱退）を、陳独秀が主張することは、前論文との関連からして十分ありうることである。前述したように、陳は当初、徹底して否定していた「国民党内国共合作」を、コミンテルンの強制によって止むなく肯定し、自己の「二回革命論」によつて理論づけをおこなつたが、感情的には、決して「国民党内国共合作」を肯定してい



なかったのである。このような陳独秀に対して、一応、中共としての組織的動きを見ると、「中国共産党は、国民党と合作を続ける。」ただし、「国民党に対する現在のわれわれの政策は、右派に反対し、左派とは密接な同盟を結ぶ<sup>(62)</sup>」とし、さらに、「中国共産党はプロレタリアートの指導者であり、民族解放運動の領袖である」と書いているのである。「右派」に反対し、「左派」と同盟する政策は、スターリンの第二段階目に近い政策である。「プロレタリアートのヘゲモニー」を、スターリンが「見通し」で打ち出す一年以上も前に、中共は「プロレタリアートのヘゲモニー」、「労働者階級の武装<sup>(64)</sup>」を打ち出していた。

しかし、こうした見解はコミンテルン執行委員会第六回拡大プレナム「中国問題に関する決議」でチェックされた。陳独秀の見解は、「運動の民主主義段階をとびこえて、直接プロレタリア独裁とソビエト権力という任務を達成しようとする極左的偏向だ」というのである。そして、コミンテルンは「帝国主義者に対して、革命的民主組織の指導下にある最も広汎な住民層（労働者・農民・ブルジョワジー）の統一的民族革命戦線を対置すべきである」、と従来の主張を繰返したにすぎなかった。

また、武装の問題については、

「中国共産党員と国民党の任務は、民主主義革命の軍隊を形成する事業を断固として支持」することであると前置きして、「中国の民族解放運動は、自分自身の軍隊の編成に着手した。この軍隊の使命は、軍閥、すなわち封建的従党に決定的打撃を加え、外国帝国主義者に抗して中国の民族的独立を守る支柱となることである<sup>(65)</sup>」、とした。そして、スターリンの理論の第一段階であることを強調した上で、武装を中共と国民党双方の任務としたのである。「労働者自身の武装」には全く触れていな

い。さらに指導権に対しては、「指導権をうるための手段」を、「党自らの拡大と団結を基礎として運動の指導権を確保するであろう」という、曖昧なものだった。

このコミンテルン路線に陳独秀も中共もすぐさま復帰せざるをえなかった。中山艦事件（一九二六年三月中山艦長で中共党員の李之龍が、蒋介石の命令で中山艦を黄埔にむけた。しかし、蒋介石は命令を出した事実を否認し、中共が暴動を起こそうとしたと逆宣言し、広東を事実上の制圧下におき、広東、香港ストライキに干渉し、ソ連人顧問宅を包囲した。また、国民革命第一軍から中共党員を追い出した）に際して出された論文で陳独秀は、「中国民族解放運動の敵は、なお強大であって、今後、中国すべての革命勢力が統一されなければ、勝利がえられないだけでなく、その各部分が存在することもきわめて困難になるであろう<sup>(66)</sup>」、と書き、蒋介石の革命戦線復帰を訴え、国共合作の強化を唱えている。

陳独秀は再び「国民党内国共合作」が、帝国主義、封建軍閥に対する最高の政策であることを認め、コミンテルン路線に完全に一致したのである<sup>(67)</sup>。また、中共は第二回拡大会議で、「まだ暫くは、ブルジョワジーを利用しななければならない。……もしも、我々があまりに猛烈にブルジョワジーを攻撃するならば、ブルジョワジーは完全に帝国主義にひきよせられ、敵の勢力を一層増強することとなり、それは革命にとって一つの損失となるであろう<sup>(68)</sup>」といっている。「あまり……攻撃するな！」という論点が、後で右翼日和見のと批判されているが、これも一九二三年以来、第一段階におけるコミンテルンの一貫した政策であった。すなわち、一九二三年一月一二日コミンテルン執行委員会は「中国共

産党は、あらゆる政治グループから独立して活動しなければならないが、……その際、民族革命運動との衝突を避けるべきである」という指示を打ち出していたのである。陳も中国共産党も、このコミンテルン路線に忠実に従っていたことになる。このように、統一戦線、「国民党内国共合作」問題においては、陳独秀は情況分析の差から反撥したが、結局、コミンテルン路線に復帰し、それを推進したことを意味する。

では、ここで「プロレタリアートのヘゲモニー」と武装について論じたい。

レーニンの場合、労働者と農民のソビエトによって、共産党（中共？）の独自性を確保し、進展させようとした。それに対して、スターリンは、「ソビエト」を否定し、何によって独自性を守ろうとしたのであるうか。彼の論文、演説から推察すると、「（中国）共産党の組織拡大」、「国民党は、共産党と国民党の二つのブロックによって形成」、及び「独自のスローガン」などが上げられる。だが、ソビエトを否定した以上、独自の軍隊をもたぬ限り、独自性は保つことは難しい。

スターリンは、こうしたやり方で独自性を保ち、「ヘゲモニー」を獲得する準備期間である第一段階を推進した後、「見通し」で、第二段階の課題である「プロレタリアートのヘゲモニー」と武装を明確に打ち出した。スターリンは、「中国には、人民の革命軍という武装した人民が存在している」として「中国では武装した反革命に対して武装した革命がたたかっている」といつているが、武装した反革命が帝国主義、封建軍閥であるなら、武装した革命は、あくまでも国民党と共産党の軍隊でなければならぬ。

さらに「中国では、軍事はいまや中国革命のもっとも重要な要素である」と強調し、打ち出された政策には、「共産党員を含めて、中国の革命家は、真剣に軍事の研究にとりかからねばならなくなっている。特に共産党員は、軍事の研究」をすることによって、「革命軍の中で、だんだん昇進し、あれやこれやの指導的地位につく、ようにしなければならぬ」としている。すなわち、国民党と中共が共有している軍隊の中で、中共党員はその軍隊のヘゲモニーを握るために軍事の研究をし、次第に指導的地位に立つ。こうしたやり方は「国民党内国共合作」が長期的に継続することを前提としている。この前提が現実のものとなって、初めて成功する可能性が生まれるのである。ところが、現実にははるかに厳しいものであった。「見通し」が出されたのが、一九二六年一月三〇日で、蒋介石が四・一二クーデタを起こしたのが一九二七年四月一二日であるから、僅か約四ヵ月半の期間に「軍事研究をして共産党員がだんだん指導的地位につく」やり方で軍隊内のヘゲモニーを中共党員が把握できたであろうか。その上、「見通し」までは、前述したように、一般論として「民族解放運動の軍隊」のみを唱え、国民党、中共の軍隊に対する影響力の差を無視していたのである。

後にスターリンが述べたように、「一九二六年四月、すなわち国民党右派と蒋介石のクーデタより一年前に、コミンテルンは、中国共産党に警告し、『右派が国民党から脱退するか、除名されるようにしむけなければならぬ』と指示<sup>20)</sup>していたということが仮に事実であるとしても、スターリンは、同時に「国民党右派の蒋介石」がおこした（四・一二）クーデタ以前にも、国民党左派と共産党員に対してありとあらゆるわなをかけていた蒋介石でさえ、中国の奴隷化に反対して、よいか、

わるいか別として、戦争をおこない、このことによって帝國主義をよわめていた」と述べ、少なくとも、第一段階には蒋介石、国民党右派が革命性をもっていたことを認めている。

その上、スターリンは「中国革命が、全民族的連合戦線の革命である間は、民族ブルジョワジーを利用するという政策である」としている。すなわち、スターリンは蒋介石、国民党右派を利用しつつ、排斥するというパラドックス的政策をとっていたことを意味する。こうした方法で、四・一二クーデタでの被害を減らし得たであろうか。

武漢国民政府を構成していた汪精衛ら国民党左派が中共との合作解消、離脱し、蒋介石と提携、再合流した。中共から見れば、考えられない汪精衛の「裏切り」行為であった。ここで確認すべきことは、これに伴う敗北は、陳独秀が「貴重な意見」を無視した結果ではなく、スターリン、コミンテルン路線に重大な欠陥があったことは明白である。スターリンは、四・一二クーデタ以後、完全に第二段階に入ったことを認識し、ことさらに汪精衛ら「国民党左派」を盲信する傾向があった。スターリンにしてみれば、理論的に第二段階を担うことになっている汪精衛ら国民党左派が、一九二七年七月一日、すなわち、四・一二クーデタ以後、三カ月余りで「中共を裏切る」とは夢にも思っていなかったであろう。

例えば、四・一二クーデタ以後、スターリンは国民党左派の意義をみるとめ、「中国の左派国民党は、一九〇五年のソビエトがロシアのブルジョワ民主主義革命に対して演じた役割に近い役割を演じている」と過大評価したり、「国民党が幾百万の革命的農民と労働者とを加入させて、こうして幾百万の革命的民主主義的組織になることが必要である。

以上のような条件がある場合にだけ、国民党はプロレタリアートと農民との革命的な民主主義的独裁の期間となるような革命政府をつくり出す可能性をえるだろう」として、絶対的信頼と大きな期待を述べている。

レーニンは、「臨時革命政府」の中で共産党が独自性を確保し、ヘゲモニーを分有する手段を民主主義独裁においた。極論すれば、スターリンは、この役割を国民党左派に期待したことを意味する。それに「武漢の国民党と武漢政府は、ブルジョワ民主主義革命運動の中心である」ともち上げた上で、「ブルジョワ革命の進行過程のうちに、それは、プロレタリア革命に移行する道があらわれる時期には、国民党内での共産党員のプロックは国民党の外部（党外連合）でのプロックによってとりかえねばならず、共産党は中国の新しい革命の唯一の指導者にならなければならぬ」と述べている。すなわち、プロレタリアートの革命への過渡期に、共産党が「唯一の指導者」になるという発想の下には、現在は「唯一の指導者でない」ことを暗黙に認めている。このことは、とりもなおさず現段階では、中共と国民党左派の両者がヘゲモニーをもっていることを意味する。ふりかえって、「見通し」で述べられている「プロレタリアートのヘゲモニー」とは、プロレタリアートのみのヘゲモニーではなく、国民党と中共の両者がヘゲモニーを分有していることになる。

以上のように、汪精衛・国民党左派に幻想をもったスターリンの指導で、武漢の国民党「汪精衛一派」が「革命を裏切り」、蒋介石と合流するのを防ぎ得たであろうか。では、陳独秀はスターリンの指示に対して、いかなる態度をとったか。果して無視したり、サボタージュしたりしたのだろうか。明らかにしておきたい。

陳独秀は、「中国共産党は民主的独裁を指向するが、それを短期間に実現することは、不可能である。改組によって汪精衛を更迭することは、とりわけ困難である。……それ故、国民党や国民党革命軍指導者との間に良好な関係を持しておくことが必要である。……もしも、我々が彼らと分裂することがあれば、我々自身の軍隊を創ることは難しくなり、不可能にさへなるだろう」と述べているのである。繰り返すが、陳は、スターリンの指示に基づき国民党と中共双方が保有する軍隊内で、「軍事研究」をすることによって、中共黨員から次第に指導的地位に就くという漸進的な方法に忠実にのっとりしていた。

陳は、汪精衛との分裂によって、このスターリン方式が不可能になることを恐れ、馬日事変（後述）に際して、農民自衛軍を解散させるという大失態を犯したのである。これらのことから明らかなように、陳独秀がスターリンの「貴重な意見」を無視した結果ではなく、中共独自の武装を否定したスターリン理論の必然的帰結だったのである。すなわち、中西が「（見通し）を忠実に実行したら、少なくとも重大な革命根拠地としての武漢を保持しえた」とするのは正当でない。中西の陳独秀批判を検討してみると、「コミンテルンの十一月決議（見通し）」にもとずいて、労働者階級が断固として、指導権を握り……労働者と農民を武装して人民の軍隊を編成し、躊躇なく政権獲得の行動にふみだすことによつて、反革命と断固として闘わねばならなかった。陳は、それらの指示をすべてサボった」と書いているが、「次第に指導権をえる」というのを「断固として」と表現できるのであるか。また、「人民の軍隊」とは国民党と共産党両者の軍隊であり、いわば四・一二クーデタ、「汪精衛の裏切り」は「人民の軍隊」内部の造反であったのである。中西

は、暗黙のうちに「十一月決議では、革命側においての蒋介石、汪精衛を反革命におきかえるというすり替えをおこなっている。

若干の結論をのべると、第一次国内革命戦争の敗北は、陳独秀がスターリン、コミンテルンの指示をサボタージュしたり、無視した結果ではなく、コミンテルン路線自体の敗北でもあった。陳独秀の政策面に表われた「国民党への幻想」は、とりもなおさず、コミンテルンの「国民党への幻想」であった。トロツキーが赤軍創出を唱えたのに対して、スターリンは、「現在の軍隊は新しい軍隊、赤軍にとりかえることは、不可能である」と否定したのはよいとしても、中国において国民党の軍隊と中共の軍隊の区切りを不明確にし、中共が独自に動かせる軍隊の創出を怠り、双方の保有する軍隊の中で相対的に優勢であった国民党によって全軍隊を牛耳られる結果を招く指導をした。とはいえ、前述したように「国民党内国共合作」は原則的に正しく、それによって驚異的な速さで中共は伸長することができた。第一次国内革命戦争の敗北は、当時、中国における反革命の力が革命の力よりもはるかに大きいことを示しており、初期の中国共産主義運動にとつて避けられぬ敗北であった。しかし、「国民党内国共合作」を続行しつつ独自の軍隊創出に努力し、農民問題を正しく処理できていたならば、敗北は避けられぬとしても局面が異なっていたことは疑いえない。

## 五 中国革命と農民問題

中国人口の絶対多数を占める農民の問題が中国革命の中で最大の問題であった。農民問題に正しく対処できるか否かが、中国革命を勝利に導



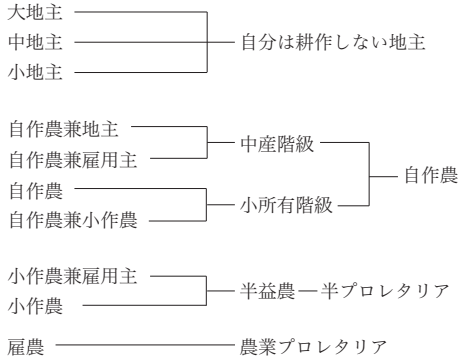
けるか否かの最大の鍵であった。「二回革命論」が、陳独秀の基礎となる思想であるとするならば、そこから生み出された政策の中で大きな誤りを犯したのは、農民政策の中にあつたのである。

まず、陳独秀の農民に対する発想の仕方から検討してみよう。前述したように陳は「進化論」の影響を受け、中国を「半植民地」に陥れている原因を、「中国の精神文明」におき、伝統を徹底的に破壊することが、中国が生き残り、再生できる道であると考えた。その際、打倒すべき対象が伝統に最もしぼられている農民であると考えたため、コミンテルンの指摘で、一応は農民にも目を向けるようになったが、心から信頼しているわけではなかった。陳は農民階級が産業化によって、プロレタリアートとブルジョワジーに階級分化する未来に望みをかけた。陳独秀は、コミンテルンが出した『中国共産党第三回大会に対する指令』（一九二三年五月三日）に呼応して、「中国の農民問題」（一九二三年七月）という農民に関しての最初の本格的な論文を執筆した。それによると、「農民（中国農民）が地主から蒙る圧迫は、地主の強大な国家（例えば、旧ロシア、インド）あるいは、資本主義が発達した国家におけるほど過酷でなく、したがって社会革命の諸運動もおこりにくい」が、「現在、すでに国民革命の一つの偉大な潜在的勢力になっており……軽視することはできない<sup>(82)</sup>」、とする。

しかし、実際には中国農民は帝国主義・封建主義の二重の圧迫のもとで中国で最大のひずみを受けている階級であり、旧ロシアや欧米諸国よりも過酷でないとはいえない。更に「社会革命」が起こりにくいということは、後の事実によって否定されることになる。

ところで、毛沢東の農民階級分析は有名であるが、陳独秀も農民階級

表1 陳独秀による中国農民階級分析



出典：陳独秀「中国の農民問題」1923年7月、『中国共産党史資料集』第1巻、267頁。

をとりあげ、大きく四つに分けて分析している（表1）。①自分で耕作しない地主、②自作農、③半プロレタリアート、④農業プロレタリアートとする<sup>(83)</sup>。毛沢東が階級意識、革命性を主眼としてとらえたのに対して、陳は一応は「騒乱」を起こす程度を考慮しているものの、主に「苦しみ」の程度」からのみ、農民階級をとらえる。すなわち、陳は農民を「軽視することはできない」としつつも、決して重視してはいなかった。さらに「中国国民革命と社会各階級」を見ると、陳独秀の農民観がさらに明らかになる。

「農民は中国全人口の大多数を占めており、もちろん国民革命の偉大な勢力である。中国の国民革命に農民の参加がえられないならば……民衆革命とはなりえないであろう」。そして中国の状況から、「外国の商品が侵入し、農民経済の破壊が日一日と甚だしいこと、兵匪の擾乱、天災の盛行、官僚紳士の横暴、この四様の環境はかえって、農民を革命に参加するように駆りたてる可能性をもつものである」としつつも、「農民は、住居が散在していて勢力は集中しがたい。文化は低く、生活の意欲は単純で保守に傾きやすい。中国の土地は広大なので難を避け、一時の安

きにつく」傾向があることから、農民は、革命に参加したいと結論づけた。また、「共産的社会革命は、どうしても農民の共鳴と協力を必要とするが、しかし、強大なプロレタリアートを主力軍としてこそ、はじめてこうした革命闘争を実現しようとした革命勢力を擁護し、こうした革命事業を建設しうる」。それ故、陳は、「中国の農民運動は、国民革命に完全な成功をまたねばならず、その後、国内産業が勃興し、普遍的な農業の資本主義化が進み、農業プロレタリアートが発展し、集中されるのであり、その後にのみ農村に真に共産的社会革命の必要性と可能性が生まれる」と主張した。

いわば農民を従属的な同盟軍に留まり、「二回革命論」的思考から、やはり国内の産業化に期待し、プロレタリアートのヘゲモニー、プロレタリアートの主力軍が生成されてから、農村における社会革命は始まるとするのである。このことは、マルクス・レーニン主義の定説である「都市から農村へ」という方式に完全にのっとっている。

これに対して、B・I・シュウォルトも「一貫したマルクス・レーニン主義者ならば、農民が革命の主要な創造力という主張をどうして承認することができるであろうか。陳がその著作の中で、主として農民に依存することについておこなった反対派、すべて彼自身の深い偏見を反映しているかもしれないけれど、それは、また、マルクス・レーニン主義の文献のありきたりの言葉でもある」と書いている。

確かに、その通りであるが、マルクス・レーニン主義を中国の状況の下で発展させて、通用しなければ、中国は解放されることも独立することも不可能であったであろう。すなわち、「半植民地」という特殊な状況にある中国革命を勝利させるためには、中国の伝統、状況とマルクス

主義をかみあわせ、人口の八〇%をしめる農民の革命性をくみあげねばならなかった。その点で、陳独秀はマルクス主義の史的唯物論とプロレタリアート絶対視の観点を、進化論の影響から、さらに強めて中国にあてはめるだけで、中国の農民運動の歴史・伝統を考えず、農民運動が高まってきた時、むしろそれを押さえつける政策を実施したのである。また、農民の革命性を生かす努力を怠ったことは否定できない。

しかし、中国では歴史的に大小無数の農民運動を繰り返してきた。陳独秀はそれを軽視した。農民運動の原因は、主に支配者階級の農民に対する厳しい誅求、自然災害、もしくは人口増、生産力の増大によって、耕地からはみ出した膨大な相対的過剰人口という社会現象の結果、発生した。多くの場合、窮乏農民は宗教と結びつき、秘密結社をつくり、結集力を強め爆発的力を発揮し、歴代王朝を打倒するのに大きな役割を果たした。

ところで、欧米列強によって「半植民地」に変えられた中国においては、帝国主義諸国と多少なりとも、依存関係を持つブルジョワジー以上に、帝国主義によって再生産の道を絶たれた農民大衆こそが、帝国主義の支配に徹底的に対抗して、それを打ち破る革命的要素を多く保有していることはいうまでもない。中国の解放と独立が帝国主義を打倒してのみ達成されるものならば、最も先進的な階級（プロレタリアート）と帝国主義によって再生産の道を絶たれ、貧窮化した階級（農民階級が帝国主義を打ち破るためには実際の闘争、自己批判、相互批判を通して自己改造を行い、社会主義的な思考を持つ必要があった）と結びつき、プロレタリアートのヘゲモニー、農民を主力軍としてのみ可能である。中国の農民の唯一の活路が中国の開放と独立に存在し、その中国の解放と独

立は帝国主義と真正面から対決し、乗り越えられる社会主義を指向することによってのみ可能とするならば、農民がブルジョワ革命だけの同盟軍ではなく、社会主義革命においても主力軍となつて推進する可能性を有することになる。その一つの表われとして、洪秀全の太平天国運動が単に清朝打倒の農民運動ではなく、天朝田畝制、身分制廃止、男女平等など、あくまでも空想的なものではあつたが、社会主義的理想をスローガンに掲げていた。<sup>(86)</sup> また、太平天国革命運動が中国化・土着化したキリスト教、義和団の乱が白蓮教の流れをくむ義和拳教をかかげて闘つたという事実は、宗教と農民反乱が密接に結びつくという伝統を、近代においても持続させていることを示している。宗教も一つの思想と考えるならば、この伝統こそ、マルクス主義、毛沢東思想を受け入れ易くする下地ともなり、自然発生的爆発力を維持しつつ、秩序だった闘いを可能にし、勝利できた要因であつたと考えられる。<sup>(87)</sup>

しかし、陳独秀は中国農民運動の伝統の無視、否定、及び近現代の農民に対する分析の甘さから、マルクス主義の一般的解釈をそのまま受け入れ、「強大なプロレタリアートだけが、大規模な共同生産と共同生活の必要性と可能性をもっているが、独立的生産の手工業者および農民はそれを必要としない。ことに農民は、私有觀念が極めて堅固である。中国では、農民の約半数をしめる自作農はすべて中小ブルジョワジーであり、いうまでなく共産的社会革命は、彼らの利益と根本的に衝突するものである。たとえ、土地を持たない小作農にしても、半プロレタリアートであるにすぎず、彼らの地主に対する反対は、地主の私有権を彼ら自身の私有権にかえる気持ちをかえることはできない」、と。

陳独秀は、農民の一般的概念を「半植民地」（私見によれば、帝国主

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

義列強の圧迫下にある後進資本主義ととらえた方が当時の中国を正確に表現しているであろう）の中国という特殊状況にある中国農民にそのままあてはめようとしたのである。

では、コミンテルンの農民路線はどのようなものであつたのか。

一九二三年五月三日、コミンテルン執行委員会は「中国共産党第三回大会に対する指令」で、農民問題に対する対処の仕方、重要性を指摘して、「中国における民族革命と反帝国主義戦線の創設は、必然的に、封建制度の遺制に対する農民の農業革命を伴うであろう。こうしてまさに農民問題こそ、すべての政策の中心問題となる」、と述べている。農民問題を軽視していた中共黨員に農民問題の重要性を喚起した価値は極めて大きい。しかし、ここでも、「全農大衆を外国帝国主義と闘争せざるをえないように指導していく必要がある」とし、農民の自発性は軽視され、農民はプロレタリアートによつて指導され、受動的に従属するだけの同盟軍と見なしていた。

コミンテルンに大きな影響力を有したスターリンの農民に対する発想の仕方を、一応見てみると、「プロレタリアートは私的所有の敵であつてブルジョワ制度を憎んでおり、彼らが民主共和制を必要とするのは、力を集めつづいてブルジョワ制度をたおすためにすぎないのに、農民は私的所有に愛着しており、ブルジョワ制度を信奉しており、彼らが民主共和制を必要とするのはブルジョワ共和制をつよめるだけである。……現在の革命はブルジョワ革命である。つまり、それは私的所有には手をつけないので、したがつて農民が、いま、プロレタリアートに武器をむける理由は「何もない」として、やはり農民をブルジョワ民主主義革命における一時的同盟者の地位に置いている。また、スターリンは、「中国

で工業中心地をさしおいて、農村にソビエトをつくるなど問題外である<sup>(91)</sup>とする。

やはり「都市から農村へ」という概念であり、農村は常に革命性においても都市に従属するという指向である。こうした当時の一般概念に対して、毛沢東の「周辺革命論」は、「半植民地」の特殊性、中国の伝統から考察した独創的なものであった。

陳独秀が急進的民主主義者であった時、推進した「進化論」から発生した農民軽視は具体的事件に対して、いかなる判断を下させたか。

その問題に接近するために、陳独秀が義和団事件に対して下した判断を見てみよう。彼は、義和団事件で殺害されたケスラーの記念碑について論じ、

「わが国民は、現在および将来において国恥記念碑を除去しようと思ふならば、必らず義和拳が再び発生しないように叫ばなければならぬ。義和拳が、再び発生しないようにするには、義和拳がつくりだされる種々の原因を完全に消滅させる以外ない。現在、二つの道がある。一つの道は共和と科学の無神に通ずる光明の道であり、もう一つの道は専制的迷信で神が幅をきかず暗黒の道である。もし我国民が、義和拳を再び発生させないように願ひ、あのいやらしいケスラー碑のような恥ずべき記念物が再び樹立されないように願うならば、結局、どちらの道を進めばよいのか」と訴えている。

陳独秀は、進化論から発生した「共和と科学」（「民主と科学」と「専制的迷信」）を対置させて、伝統を背負う農民反乱を弾劾し、「共和と科学」こそ中国を救う道であると訴えているのである。しかし、西欧流の「共和と科学」を模倣することによって、中国を解放することができ

るであろうか。前述したように帝国主義によって再生産の道を絶たれた農民こそが、旧社会の母斑（生活、思想、制度などに根強く残る旧社会の残存物）を残しつつ、「民主と科学」を乗り越える革命性を有していたのである。陳の進化論は、西欧諸国が「民主と科学」をおこなっているが故に中国に勝利しているとし、他方、中国は農民をはじめとする大衆が迷信的であるが故に敗北しているとする思考法を可能にした。そのことは、いきおい帝国主義列強の侵略に対してよりも、むしろ自国の農民運動への痛烈な批判となって現れる。こうして、マルクス主義の固定化した農民把握を何の苦もなく受け入れ、中国農民評価にスライドさせた。

次に北伐に対して陳独秀はどのような姿勢をとったか。それを決定する大きな要因の一つは言うまでもなく、「二回革命論」で、具体的には「農民運動をいかに把握するか」、「農民運動が革命の高まりの中にあるのか否か」、「農民運動が軍閥打倒にどれほどの役割を果たさるか」の評価によるものである。当時、中共中央はキサンカなどソ連軍事顧問団の「北伐必敗論」に影響され、北伐に人民団体参加を決定しつつも、北伐が蒋介石の軍事的政治的な優位を招くとして極めて消極的であった。無論、その裏には農民運動軽視がかくされていたことは言うまでもない。

当時、コミンテルン代表は「武装した農民では、陳炯明を討伐することも北伐することもできない。その上、国民党の疑惑を呼び起こし、また、国民党にたいする農民の反抗を呼び起こすであろう<sup>(92)</sup>」、といったたたという。

陳独秀も北伐に対して消極的であった。陳は（「廣州」）国民政府の北



伐を論ず」（一九二六年七月七日）の中で、第一に、帝国主義者との直接の武力衝突ではない。第二に、広東以外の各省人民は、北伐軍の到来を坐してまとうとする幻想を抱いている。第三に、現在の国民政府の北伐は、まだ革命力量がみなぎり溢れ、外に発展したものでなく、むしろ呉佩孚が湖南に進攻したために国民政府としては、やむをえず自衛のために出兵し、湖南を援助しているにすぎない。第四に国民政府の北伐の戦費として軍事公債を発行して、紳士、富豪から調達すべきであり、労農兵からしぼりあげるべきではない、とした。

これに対して黄埔軍官学校学生の黄世見が陳独秀を批判し、「①帝国主義者の走狗である軍閥と闘っているのに直接帝国主義と武装衝突してはいないといえるであろうか。それでは、まるで『人を殺したのは自分ではなくて、武器だ』と言っているようなものである。②北伐が到来することによって民衆は革命工作を行うことができる。③実力が完備されたのちに起きた革命運動などは、歴史上あったためしがなく、これまでの歴史は、まず革命運動がおこり、民衆がそれに呼応し、その後で革命勢力が、徐々に増大していったののみである。④革命とは、少数の者が犠牲となって多数の被圧民衆の利益をはかるものである。……革命が外部に向って発展している時、革命政府治下の人民は、多少なりとも義務を果たすべきであって、それは決して今後とも引き続いて行われるほしいままの取奪ではない」としている。

まず北伐（中国の中央集権化を目指す北伐は、①孫文による一九二二年二月から六月、②二四年九月から一月）、二五年三月に孫文が死去し、③蔣介石が二六年九月から二八年一二月の三回ある。本稿では主に第三回目を指す）を進攻戦であるとみなすか、もしくはは防御戦としてみ

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

表2 北伐前後における民衆運動人数概数統計 (1925-1927)

年	農民組合員数	労働組合員数	中共黨員数
1925	200,000	450,000	994
1926	3,000,000	1,200,000	12,000
1927	9,800,000	2,800,000	57,900

出典：波多野乾一『中国共産党史』第1巻、時事通信社、138頁参照。

なすか。また、革命力量があふれでる前に進攻してはならないのかという問題がある。そこで、実際に北伐前と北伐後の農民運動、労働運動のたかまり、推移は表2の通り。

表2によれば、労働運動、農民運動は北伐前にすでに高まりつつあったし、北伐開始後は、さらに高まってきた。こうした趨勢の中で北伐は勝利のうちに前進した。そして、北伐が勝利のうちに進展したことは、農民運動、労働運動の発展を促進したのである。

陳独秀が、「北伐到来前に組織化する努力をせよ」といったことは、ある程度当を得ていたと思われるが、黄世見の「常に初めは革命勢力は現権力より劣っているが、進攻によって労働運動、農民運動を誘発できる」、呉佩孚の攻撃に対して、消極的な湖南防御では湖南省すらも失

う」という主張の方が状況に合致していた。陳独秀が「右翼日和見主義」のレッテルを貼られた最大の理由は、当時の民衆運動の高まりつつある状況、そしてさらに急激に高まる可能性を見抜けなかったことに帰着すると思われる。

とはいえ、黄世見の「実力が完備された後におきた革命運動は、あったためしがなく」、革命優先の主張は、確かに北伐においては労働運動、農民運動がもり上がるという状況と合致し、成功をおさめ、正当だったように見える。しかしながら、第二次革命戦争時期においては暴動先行方式

(この時期の中共中央はロシア革命の経験と並んで北伐の経験を強調した。中共中央は北伐の成功に有頂天になっていたのである)は、「革命的気分が高揚しているか」、「客観的状况はどうか」を冷静に考えない姿勢を生み出した。そして、状況の変化を無視し、地道な大衆の組織化を怠る、いわゆる「極左日和見主義」を現出したといえよう。

結局のところ、陳独秀は状況分析の誤りによって「大衆運動が高揚」を見抜けなかったことを完全に総括できず、「革命をおこなえば、大衆は徐々についてくる」という、これまた状況分析の欠如から対照的な誤りを犯した。ただし、これもコミンテルン・スターリン自身の第一次国内革命戦争に対する反省が不十分であったことが、大きな影響を及ぼしたことはいうまでもない。

次に、「直接に帝国主義と衝突しているか否か」、「北伐をいかに位置づけるか」という命題に関して、毛沢東は「国民革命と農民運動」(一九二六年九月一日)で、農民を高く評価して「農民問題は国民革命の中心問題である。農民が国民革命に参加せず、擁護しないならば、国民革命は成功できない」とした。そして、「経済が落后した半植民地の農村封建階級は国内統治階級、国外帝国主義の堅固な基盤であり、この基礎を揺さぶることなしに、絶対にこの基盤の上の構造を動かすことはできない。……中国の軍閥は、これら鄉村封建階級の首領に過ぎない。軍閥打倒をいいながら、鄉村封建階級を打倒しなくてよいというのでは、本末転倒ではないか」とし、農村の封建階級に対する農民運動こそ帝国主義、軍閥の基盤を揺るがし、全体構造を打倒する近道であると主張した。すなわち、「弱い環」である底辺部を農民運動によって各個に撃破すれば、勝利できるとする理論であった。すなわち、北伐は農民運動の

激発によって勝利できるとするのである。毛沢東の「湖南農民運動の視察報告」は、この理論の延長上にある。

では、陳独秀の馬日事変に際しての処理方法、政策はどこから生み出されたかに今度はアプローチしたい。

いわゆる馬日事変とは、一九二七年五月武漢国民政府に属する反動將校が次々と反乱をおこし、農民、労働者の武装解除と殺害をおこない、長沙に「反動政權」を樹立した。怒った農民自衛軍一〇万人が攻撃しようとする寸前、陳独秀がストップをかけ、行政措置で解決しようとした。その結果、反動勢力を増長させたというものである。

陳独秀が革命側に「汪精衛グループを引きとめるため、依然として投降と譲歩を繰り返した」というのは事実である。無論、これは農民を汪精衛グループよりも低く考え、農民の威力を正当に評価できなかったと見なされても致し方ない。

しかし、陳独秀は馬日事変の勃発前、「中国共産党五全大会における中央委員会の政治・組織報告」をおこない、次のように述べている。

「中国共産党第四回大会(一九二五年一月)以来、この問題に関する主要な工作は農民を組織し、小作料引き下げのためにたたかうことであつた。……しかし、農民は自然発生的盛り上がりを示しつつあり、土地問題の解決を求めている。……我々はあまりに平和的政策を追求しつづけてきた。……現時点における唯一の正しい解決は、広まった革命を深化させることある」。

このように、陳は、間違いなく元来の農民軽視から一歩前進し、農民の自然発生的運動を高く評価している。これは、北伐において陳の予想をうわまわる農民運動の勃興をみて、「国民政府の北伐を論ず」(一九二

六年七月)を書いた時の姿勢を転換している。それなら、なぜ馬日事変に際して農民自衛軍を解散させたのか。国民党への不信も、五・三〇運動、中山艦事件を経過して高まってきており、彼にとつて国民党(汪精衛ら左派グループ)をひきとめておく必要性はなかったのではないか。

その解答はコミンテルンにある。コミンテルンは、一九二三年一月に「国民党に対する中国共産党の態度に関する決議」を出して以来、「中国共産党は……民族運動との衝突を避けるべきである」と一貫して主張している。さらに四・一二クーデタ以後の「中国の新しい情勢とコミンテルンの政策に関する討議」をおこなった際、コミンテルン執行委員会第八回拡大ブレナムは、「中国問題に関する決議」(一九二七年五月)において「武装蜂起時期尚早」を明確に打ち出した。

「若干の同志たちから提出された戦術は、完全に不合理なものであったと考える。この戦術とは、帝国主義者と蒋介石に対して先んじて蜂起をおこなうか、もしくは広範な戦線を基礎に彼らに武装闘争を挑むことであった。……蜂起の開始は一定の成功のチャンスがある場合のみ可能である。……上海の労働者が大規模の武装攻撃を展開していたならば、彼らは蒋介石と帝国主義者の武装ブロックによって殺戮され、中国プロレタリアートの花は、勝利のチャンスが皆無のまま、戦闘で肉体的に根絶されたであろう」とし、中国の「共産党は、労働者・農民およびブルジョワジーの連合戦線をあらゆる方法で強化することを自己の任務としなければならない」と結論づけた。

すなわち、当時、コミンテルンは武装蜂起の状況にないと判断しており、帝国主義と蒋介石への対策は「労働者・農民および小ブルジョワジーの連合戦線」の強化にあった。馬日事変を起こしたのは武漢国民政

中国共産党総書記時期における陳独秀(菊池)

府の一部であり、これを農民が叩くことは、小ブルジョワジー(汪精衛一派)との連合戦線を破壊し、「弱体化」させると考えても不思議ではない。小ブルジョワジーが敵にまわることはとりも直さず、汪精衛一派を加えた帝国主義や蒋介石との武装闘争をおこない、中共が「肉体的に根絶される」危険性があることを意味する。スターリンが、「第二段階」に位置づける武漢国民政府は、中共黨員がその中で「ヘゲモニー」と「武装」を掌握し、それをテコに帝国主義と蒋介石に打撃を与えるまで崩壊させてはならないものであった。

以上のことをまとめると、コミンテルンは帝国主義と蒋介石の力量の過大評価と農民の力量の過小評価から、現在、武装蜂起を行うことは、「肉体的に根絶される」という予測を立てていたのであり、その情況分析の延長上に馬日事変における農民自衛軍一〇万人の解散は位置していた。陳独秀は動揺しつつもコミンテルン路線にのつとつた。無論、陳がコミンテルンの主張を受け入れたのは、その絶対的権威に抗することができなかつたこともあるが、それと同時に陳の理論「二回革命論」による農民軽視もあつたことを見逃すことはできない。

馬日事変以降、陳独秀は農民軽視の傾向を強めていく。陳はコミンテルンに対して現在の「農民運動」は「ゆきすぎ」であると電報を打ち、「国民革命軍の九〇%をしめる湖南出身の軍人は、すべて農民運動の『ゆきすぎ』について反感を抱いており、夏斗寅の暴動と長沙のクーデターは、この一般的な反感の表われである。このような情況の下では、……『ゆきすぎ』を調整し、土地没収の実行を緩和することが必要である」とした。これは、中共が独自の軍隊をもっていないことと、農民運動の力量を正しく判断できないために生まれた意見であつた。それ故、

陳は続けて「計画をよくたてて、十分に力を組織して土地没収を実行する準備段階として、農民自治の確立をすすめる、農民の武装をすすめるなければならない」とせざるをえなかつたのである。すなわち、独自の軍隊をもたぬ中共が潰滅せずに土地没収するためには、まず農民自治の確立と農民武装が不可欠と考えたのである。このことは、陳が現在の農民運動は劣勢であり、「ゆきすぎ」は、すべての革命運動の潰滅の危機を招くとするコミンテルン路線と同一の情况分析に戻ったことを意味する。

陳独秀と毛沢東は湖南省の農民運動に対して対照的な見解を打ち出した。陳は「湖南における初期の農民運動は、党の指導が欠けていたため、結局、幾分原始的な幼稚な行動……を避けられなかつた」とし、「幼稚な行動」と見なした。

それに対して毛沢東は、「湖南農民運動視察報告」で、農民運動を「ゆきすぎ」、「幼稚」とする意見に反駁した。「農民のやっていることは、完全に正しく、彼らのやっていることはすばらしい」とし、「ゆきすぎの行動も第二の時期には、革命的意義を有している。……誤りを正すには度をこさなければならず、度をこさなければ誤りを正せない」と主張した。こうして湖南農民運動を意義づけ、全面的な支持を表明した。

毛は、「彼らは自分達を束縛している一切の網をつき破り、解放の道突き進むであろう。すべての帝国主義、軍閥、貪官汚吏、土豪劣紳らは皆、彼らによつて墓場に葬りさらされるであろう。一切の革命政党、革命的な同志は、すべて、彼らの前で、その審査を受け、取捨選択されるであろう」と熱情的に訴えた。農民運動が農民自身の解放のみならず、中国全体の解放をももたらすと予言したのである。また、農民が一

方的にプロレタリアートによつて審判されるのではなく、逆に最も革命的とされるプロレタリアートでさえも、農民によつて、その革命性を審査されるのである。このことは、農民が従属的な農民軍ではなく、対等で主力となる勢力と見なしたことを意味する。ここには、スターリンのように、「都市の革命が成功してから、農村の革命に着手する」といった思考がないことはいうまでもない。

こうした把握を可能にしたのは、都市階級の名称を利用して農村階級を分析した「中国社会各階級の分析」である。毛沢東は貧農と大部分の半自作農を半プロレタリア階級、雇農などを農村プロレタリア階級とすることによつて、中国農民の中に潜在的に存在するプロレタリア的要素をみいだすことに成功した。その結果、毛は、農民が産業プロレタリアートによつて全面的に指導されなくとも、ある程度、自らを指導して自主的な運動をおこなえる可能性があることを把握できた。農民が自己解放のみならず、産業プロレタリアートと同様に、帝国主義、封建主義を打倒し、社会主義までも目指す使命を達成できる力量を備えていると考えることができた。

**表3**を参考にすると、中国全国人口の約六〇%も占める貧農、雇農、遊民は、プロレタリア的要素を内包した革命的威力をもつことになる。

この毛沢東の報告書は約二〇〇万人（全人口の〇・五%）の産業プロレタリアートが、こうした農民の自主的運動を尊重しつつ指導してのみ、中国革命が勝利できる可能性を指摘した点にある。

中西功は、著書『中国革命と毛沢東思想』の中で、「一九二四年一月……広東では……国民政府の機構と一〇万をこえる国民革命軍の他に、数一〇万の労働組合、六〇万の農民組合、三万の自衛軍をもつてい



表3 中国農民概数統計（1927年）

	人数	備考
中国全国人口	420,000,000	
農民総数	336,000,000	全国人口の80%
有土地農民数	150,000,000	農民総数の45%
貧農数	66,000,000	有地農民の44%
無土地農民（雇農、遊民など）	186,000,000	農民総数の55%

出典：『第1次国内革命戦争時期的農民運動』人民出版社、1953年、3～4頁参照。なお、貧農数は有土地農民数から筆者が算出。

た。中国革命といえは、農村だと決め込んでいる人にとって、それは大きな反省の材料である<sup>(10)</sup>、と書いているが、これは論理の逆転であつて、農村の革命性こそ無視されていたのである。革命といえは、都市と考へ革命を常に都市中心とし、農村を都市の従属的位置にしかおかなかつたのではないか。

また、中西功は、毛沢東の「中国社会各階級の分析」を批判し、「農民の広汎な遊民と近代的な産業労働者が、同じく無産階級となるのである」と書き、毛が「科学的社会主義を理解していない<sup>(11)</sup>」、と結論づけた。しかし、総人口の約六〇%をしめる貧農や雇農などの中に存在するプロレタリア的要素を指摘し、社会主義と直結する新民主

主義革命の推進力となしえた点に、マルクス主義の現実的・実践的意義があるのではないだろうか。中西功は中国の状況を無視して、いわゆる「科学的社会主義」を教条的に中国に当てはめればよいと考えている。もし「農民は土地をえれば、保守化し、社会主義を指向しなくなる。それ故、彼らはブルジョワ革命における一時的同盟者だ」とする一般的社会主義理論の農民把握から派生した政策を、中国にそのままあてはめたらば、むしろ非現実的な政策となる可能性がある。

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

最後に、毛沢東の「湖南農民運動の視察報告」に対する中西功の批判を検討してみよう。中西功によれば、毛沢東の考え方は「大衆の欲求を中心に団結して闘う原則ではなく、ただ激しい行動をすればよいという考え方である<sup>(12)</sup>」とした。果たして毛沢東は、そのように言っているのだろうか。毛は「中国社会各階級の分析」で、まず同盟する味方と打倒すべき敵を指し示している。さらに毛は前述の如く農村封建階級、軍閥、さらに帝国主義の三重構造に言及した上で、農村封建階級に打撃を与える重要性を計算し、主張している。すなわち、毛は「ただ激しい行動をすればよい」と単純には考えていなかった。

### おわりに

以上のことから以下の結論を導き出せる。

史的唯物論によれば、封建制から資本主義、社会主義、共産主義に必然的に発展することになっている。したがつて、理論的には、国力、軍事力、工業力など諸側面で圧倒的優位に立つ資本主義列強に打ち勝つためには、弱国大國の中國が社会主義を先取りし、それによって列強を迎え撃つことと考へても不思議ではない。陳独秀はその理論的先駆者であつた。

第一に、陳独秀がマルクス主義者に転ずる以前、あらゆる行動の基礎原理となつたものは、「進化論」であつた。その「優勝劣敗」説は、優れた西欧は劣つた中國に必然的に勝利し、「弱肉強食」によつて中國は滅亡の淵に追い込まれる。したがつて、中國は強くならねばならない。とはいえ、主力軍となるはずのプロレタリアートは産業未発達な中國で

は絶対数が少なかった。それ故、陳は中国資本主義化による農民層分解で、プロレタリアートが多数生みだされる未来に期待した。陳は「進化論」の影響から史的唯物論の客観的自然史過程を重視し、上部構造が経済的土台によって規定されるというマルクス理論（「物質的生活の生産様式が、社会的・政治的および精神的な生活過程一般を制約する」<sup>(10)</sup>）を信じ、「二回革命論」は生み出した。それ故、産業化によるプロレタリアート創出、及び経済諸力の発展が労働者階級の革命性を高めていくと確信した。したがって、この時期の陳独秀は、ある意味で正統なマルキストであった。

第二に、「国民党内国共合作」を巡る問題があげられる。社会主義革命を目指す陳独秀にとって、中国の現状は、「ごく少数の自覚した労働者は質の上で極めてすぐれているが、数の上で実に少なく、他の労働者は質においても数においても皆幼稚であり、それ故に一つ独立した革命勢力にはなりえない」<sup>(11)</sup>と分析した。したがって、まずは「反帝反封建闘争」を勝ちぬくために不可避的に同盟問題を浮上させた。陳は党外連合を唱えた。相対的に「進歩的な階級」と同盟を結ぶことと自体、否定する必要はなかった。ところが、コミンテルンが打ち出した政策は中共党員の国民党加入であった。陳は階級の基盤の異なる二党が一つの党を形成できないと猛反対した。結局、コミンテルンの「中国革命は国民革命であり、ブルジョワ民主主義革命」との定義にしたがい、陳も「ブルジョワジーは革命的であるはずだ」と考えなおし、農民とブルジョワジーのどちらを有力な同盟者とみるかという二者択一において、後者を選ぶことを意味した。陳が「ブルジョワジーは、結局、農民よりは集中しており、労働者より雄厚であるから、国民運動がブルジョワジーを軽

視するのは、「極めて大きな誤った考え」<sup>(12)</sup>として、「国民党は、唯一の民族革命集団」だとするコミンテルン路線（前述の如く中共はコミンテルン中国支部）を、陳は「二回革命論」的発想から受け入れた。とはいえ、「国民党内国共合作」によって中共組織を急速に拡大し、国民党とヘゲモニーを争うまでに成長したことは疑いえない。

第三に、陳独秀とスターリン演説「中国革命の見通しについて」との関係である。陳がスターリン演説をサポータージユ、あるいは無視した結果、蒋介石の四・一二クーデタ、次いで「汪精衛の裏切り」（七・一六反革命）に遭い、最終的に中共は潰滅的打撃を受けたとされる。果たしてそうであろうか。明白なことは、スターリンの演説は国民党（蒋介石、次いで汪精衛ら）への幻想の上に立脚していた。国民党と中共双方の武装を強調しているものの、その実体は曖昧であった。スターリンは、後に「中国共産党の過去における政策は、プロレタリアートの戦闘力を高めたし、プロレタリアートと広汎な大衆との関係を密接にしたし、これらの大衆の間におけるプロレタリアートの威信を増大させた。……しかし、敵の力が強大である場合、正しい政策であっても、やはり勝利することはできない」<sup>(13)</sup>と総括している。これは、一応正確な把握といえるかもしれない。だが、スターリンが政策面で一つの誤りも認めなかったことは、再び李立三、次いで王明といったコミンテルンを絶対視する中共指導部を生み、「都市から農村へ」という公式主義に陥らせ、農民指導の誤りを繰り返した。このことは重大である。なぜならコミンテルンは自らの誤りを陳にすべて転嫁したことによって、中共を「右翼日和見主義」から「左翼日和見主義」に一八〇度転換させ、裏返しの誤りを犯させたからである。

第四に、農民問題である。コミンテルンと陳独秀の双方に大きな問題があった。スターリンは農民をブルジョワ革命における一時的な従属的同盟者と見なした。陳は「二回革命論」の構築は現状否定から発する。すなわち、腐敗墮落した封建体制を支えるものは農民であるとの不信感があり、その革命的意義を認めることができず、繰り返すが農民階級が産業化によってブルジョワジーとプロレタリアートに階級分解する未来に期待をかけた。こうして、陳は中国革命における自然発生的な農民運動のエネルギーを正確にとらえることができなかった。北伐や馬日事変においても、コミンテルンの指示を受け入れる素地を、陳は理論的にも主観的にももっていたのである。結局、双方がもつ農民運動の過小評価から国民党重視の傾向を強め、敗北したといえる。要するに陳独秀の中共党史における位置は、「進化論」により一層増長された史的唯物論を中国に適用したことにある。こうして中国の客観的情勢を軽視し、農民を正確に理解できなかった。結局、陳の理論は、中国の土壌と歴史の中で批判される運命にあった。だが、その経験と教訓は中国革命の特徴や法則への理解を深める経なければならない一段階であった。

中共除名後、陳独秀の農民軽視はスターリン以上に農民を軽視するトロツキー理論と結びつくことを可能にした。トロツキーは、中国の農民部隊は「自ら『赤軍』と名のついている。つまり、彼らは自分をソヴィエトの軍隊と同一視しているのである。その結果、中国の革命的農民が、彼らの支配層によって、当然ながら中国労働者に帰属すべき、政治的、道徳的資本をあらかじめ横領している」と書き、「農民運動は、大土地所有者、軍閥、封建論者、高利貸にむけられるかぎりにおいて、強大な革命的要因である。だが、農民運動そのもののうちには、きわめて強力

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

な地主的、反動的傾向があつて、一定の段階に達すると、運動は労働者に敵意をもつたものになる」と断言する。陳が中共を除名された後、トロツキーに急接近し、その理論を擁護する理由は、双方が理論的に有するプロレタリアート絶対視と、そこから発する極度の農民不信にあつたといえよう。

#### 註

- (1) 陳独秀「東西民族根本思想之差異」一九二五年二月一五日、『独秀文存』巻一、上海亜東圖書館印行、三五頁〜四〇頁参照。
- (2) 陳独秀「我的根本意見」一九四〇年一月二八日、『實庵自伝』伝記文学出版社、八四頁。
- (3) ①胡喬木著、尾崎庄太郎訳『中国共産党の三〇年』国民文庫（大月書店、一九五三年、二三頁。「もしも同志スターリンとコミンテルンのこれらの貴重な意見が、中国共産党員の指導者適時にめざめさせていたならば……敵（蔣介石ら）は……革命を一举に打ち破ることができなかったであろう」）。②胡華著、国民文庫編集委員会訳『中国新民主主義革命史』国民文庫、一九五六年、一一一〜一二四頁にも同様な総括が見られる。これが戦後の中華人民共和国政府の公式見解である。
- (4) 第一に、日本では、例えば、①最も関連本を出しているのが、横山宏章で『陳独秀の時代——個性の解放』をめざして——慶應義塾大学出版会、二〇〇九年は、孫文の「以党治国」から現在の共産党独裁に至るまで、「無能な民衆」を上から統治しようとしたが、むしろ陳独秀の闘いから自覚した民衆個々人にこそ未来を託すべきとの結論を導き出す。なお、横山には、概説書『陳独秀』朝日選書（一九八三年）、『孫文と陳独秀——現代中国への二つの道——』平凡社新書（二〇一七年）もある。②佐藤公彦『陳独秀その思想と生涯 820-1942』集広舎、二〇一九年は、陳独秀の遺書、及び胡適が陳独秀を「終身の反対派」と称したこと同意し、それらを導き手として、陳と胡適の関係を「民主と科学」など近代思想的側面から四九年までを考察するものである。③長堀祐造『陳独秀——反骨の志士、近代中国の先駆者——』山川世界史リブレット、二〇一五年、長堀は中国文学専

門家で、魯迅とトロツキー派の著書がある。「反骨の志士」として反清運動、新文化運動、中共総書記時期、そしてトロツキー派に転じた後を記述する。一般向けで読みやすく、特に清朝時期の日本留学は不明点が多いだけに参考になる。第二に、中国では、①石鍾揚『文人陳独秀—啓蒙的智慧—』陝西人民出版社、二〇〇五年、②朱文華『陳独秀評伝—終身の反対派—』青島出版社、二〇〇五年は、陳の民主派、中共、トロツキー派各時期を論じながら、最終的に自分はいかなる党派にも属していないと主張し、孤高の「反対派」であったことを浮かび上がらせる。③袁垂忠『陳独秀の最後十五年』中国文史出版社、二〇〇五年、④陳璞平『陳独秀之死』青島出版社、二〇〇五年は、陳独秀研究がタブーであったことを述べ、中共総書記時期は間違いも犯したけれども、トロツキー派時期を含めて共產主義に対して信念を有していたとする。第三に、台湾では、郭成棠『陳独秀与中国共產主義運動』聯経、一九九一年は陳の民主派としての側面を強調し、中共総書記時期の陳を全面否定する。

(5) 陳独秀『俄羅斯革命与我国民之覚悟』一九一七年四月一日、『独秀文存』巻一、亜東図書館(上海)、一九二二年、一四三頁。

(6) 陳独秀『二〇世紀俄羅斯的革命』一九一九年四月二〇日、『独秀文存』巻二、亜東図書館、一九二二年、二九頁。

(7) 「進化論」と陳独秀の出会い、そして陳への影響を考えると、第一に「優勝劣敗」、「適者生存」という「進化論」の公式から、帝国主義の中国侵略まで言及した敵復の『天演論』(一八九八年)が浮かび上がる。第二に、陳独秀の日本留学。松本清張の「北一輝における『君主制』」Ⅱ(『世界』岩波書店、一九七三年二月)には、「北は、明治三十七年(一九〇四年)に初版が出版された丘浅次郎(東京帝国大学動物選科卒業後、ドイツに留学、帰国後、東京高等師範学校教授、理学博士)の『進化論講話』を読み、彼(北)の『進化論』はそれからの知識が多いといわれる」(二三四頁)との記述がある。また、当時「進化論」の日本への強い影響については、八村竜一『進化論の歴史』(岩波書店、一六八頁〜一七一頁)にも記述されている。陳独秀が弘文学院(一九〇二〜〇九年)、東京高等師範学校で学んだことを考えると(実藤惠秀『中国人日本留学史』くろしお出版、一九六〇年参照)、丘浅次郎の『進化論講話』を読んだのみならず、

丘の講義を直接聞いた可能性も十分考えられる。陳独秀自身、「古の道をかえ、人心社会をはつきりと一新させることが近代文明の最大の特徴である。それには三つある。一つは人権説であり、一つは生物進化論であり、一つは社会主義である」(『法蘭西人と近世文明』一九一五年九月、『独秀文存』巻一、一一〜一二頁)と書き、明白に「進化論」の影響を受け、その社会改革における価値を認めている。

(8) (9) 陳独秀『敬告青年』『青年雜誌』創刊号、一九一五年九月。  
(10) 陳独秀『抵抗力』一九一五年十一月、『独秀文存』巻一、三一頁。同論文で「万物の生存進化がどれほどのものは、ことごとく抵抗力の有無強弱をもって標準とする。優勝劣敗の法則を逃れることはできない」(二八頁)と書き、「優勝劣敗」を唱えている。

(11) 陳独秀『克林德碑』一九一八年一〇月、『独秀文存』巻一。  
(12) 李大釗は、「青春の国民と白首(老人)の国民が遭遇すれば、白首は必ず敗北する。これは、天演(進化)の原則で、あるいは逃れることができない」と「進化論」の影響を残しつつも、同時に「白首の中華は、青春の中華がそれに基づいて新しい生命をはらむ実である。青春の中華は、白首の中華が再生を托した花である。……次第に衰退していく中華があるが故に、まさに再び開華せんとする中華が存在する」(李大釗『青春』、中国李大釗研究会編『李大釗全集』第一巻、人民出版社、二〇一三年、三一二、三一四頁)と論じる。こうして、衰滅するが故に、再生するという循環的な歴史観を打ち立てた。これが李大釗が本質的に有す樂觀主義的思想的根拠となった見て間違いない。

(13) 史的唯物論は、はじめから「進化論」の影響を受け、陳独秀が容易に史的唯物論、特にその自然史的発展過程を受け入れることができた大きな要因と考えられる。「ダーウインが有機体の発展法則を発見したように、マルクスは人間歴史の発展法則を発見した(エンゲルスの「マルクスへの葬送の辞」、八杉竜一『ダーウインの生涯』岩波新書、一九五〇年、二二二頁)。「ダーウインの学説は、自然界の変化と発展に焦点を合わせており、古い唯物論を克服するものと考えられた。……マルクスは……自分の思想と共通するものをその中に発見した」(八杉竜一『進化論の歴史』岩波新書、一九六九年、一六五頁〜一六七頁)。「マルクスは『種の起源』に



関して『われわれの見解に自然史的基礎を与える』と言っている」（現代教養百科事典）第五巻、暁教育図書版。エンゲルス「猿の人間化における労働の役割」、奥田八二訳『史的唯物論』新潮出版版など参照）にも史的唯物論と進化論の結びつきがみられる。

(14) 胡喬木、前掲『中国共産党の三〇年』一七頁。

(15) マルクス著、杉本俊郎訳『新訳・経済学批判』国民文庫、一九六六年、一六頁。

(16) マルクスは、「物質的力は物質的力で倒すしかない。しかし、理論もそれが大衆の心をつかむやいなや物質的力になる」（マルクス著、大内兵衛監修『ヘーゲル批判』『マルクス・エンゲルス著作集』第一巻、新潮出版、一九五七年、四〇頁）とし人間の意識の力をかなり重視していた。この理論の延長上に上部構造の反作用の問題も生れる。また、イデオロギーは、「独立的に発展し、それ自身の法則にのみ従う自立的な存在として諸思想に従事する」（エンゲルス著、松村一人訳『フォイエルバッハ論』岩波文庫、一九六〇年、七八頁）とし、上部構造の独自性を強調している。

(17) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年一月、日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第一巻、勁草書房、一九七〇年。劉少奇も鄧小平も同様のことをいい、人民共和国成立後のプロレタリア文化大革命で「唯生産力論」として批判された。

(18) 李大釗「由経済上解釈中国近代思想變動的原因」『新青年』第七卷二號、一九二〇年一月。「国内産業は圧倒され、輸入は輸出を超過し、全国民は、しだいに世界のプロレタリア階級の一部にかえられ、すべての生活には、困窮不安の現象があらわれた」とする。

(19) ①「一回革命論」は、封建社会、「半封建社会」でもプロレタリアートが指導する社会主義革命をおこない、資本主義段階を経ずして社会主義社会を形成するという理論。②「二回革命論」は、封建社会、「半封建社会」においてはブルジョワジーが指導するブルジョワ民主主義革命をおこない、ブルジョワジーが勝利してブルジョワ共和国が成立した後、資本主義の生産力が伸びその生産関係を桎梏とするようになった時、社会主義革命を行うという理論。③「新民主主義革命」は、封建社会、「半封建社会」においては、プロレタリアートが指導する民主主義革命をおこない、

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

民主化を徹底することによって（資本主義発展段階を否定して）社会主義革命へと直接連結させるという理論。

(20) 陳独秀「關於社会主義的討論」一九二〇年二月、『新青年』第八卷第四号、一九二〇年一月。

(21) 陳独秀「國慶紀念底價值」『新青年』第八卷第三号、一九二〇年一月。

(22) 陳独秀「對於時局的我見」『新青年』第八卷第一号、一九二〇年九月。

(23) 陳独秀「答鄭賢集」（国家法律政治）一九二〇年一月、上海亜東圖書館印行『独秀文存』卷三、一九二二年、二五七頁。

(24) 陳独秀「答蔡和森」（馬克思學說与中国無産階級）一九二一年八月、『独秀文存』卷三、三〇〇〜三〇一頁。

(25) 陳独秀「資産階級の革命と革命資産階級」一九二三年四月二五日、『中国共産党史資料集』第一巻。

(26) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年二月、『中国共産党史資料集』第一巻。なお、丸山松幸によれば、陳らの社会主義者は「大衆を「訓練」し「指導」し「保護」すべき対象」（丸山松幸「社会主義論における中国初期社会主義者たちの思想」、関西大学『文学論集』第一七卷四号、一九六八年一月）と見なしていたとする。理論家で知識人の陳独秀が、大衆運動の中心となるべき中国の「幼稚なプロレタリアート」すらも経験不足で鍛え上げられていないと考えており、当然のことながら「訓練」、「指導」、「保護」すべき対象と見なしていたらう。

(27) 陳独秀「われわれは何故闘うのか」一九二六年九月、『中国共産党史資料集』第一巻。

(28) 陳独秀「中国共産党第二回全国大会宣言」一九二二年七月、『中国共産党史資料集』第一巻。

(29) 陳独秀「中国共産党第二回全国大会宣言」一九二二年七月、『中国共産党史資料集』第一巻。

(30) 陳独秀「造国論」一九二二年九月、『中国共産党史資料集』第一巻。

(31) 陳独秀「告全党同志書」一九二〇年二月一〇日、『中国共産党史資料集』第四巻、一九七二年。

(32) 陳独秀「ヴォイチンスキーへの手紙」一九二二年四月六日、ソビエト連邦科学アカデミー国際労働運動研究所著、国際関係研究所訳『コミンテル

- ンと東方』一九七一年、二二〇頁。
- (35) レーニン「民族および植民地問題委員会報告」一九二〇年七月二六日、コミンテルン第二回大会『帝国主義と民族・植民地問題』国民文庫、一九七頁。
- (36) (37) レーニン「民族および植民地問題にかんするテーゼ原案」一九二〇年六月五日、前掲『帝国主義と民族・植民地問題』一九三頁。
- (38) レーニン、前掲「民族および植民地問題委員会報告」二〇一頁。
- (39) 「マルクス主義の漫画および『帝国主義的経済主義』について」一九一六年八月、『帝国主義と民族・植民地問題』、一二〇頁。
- (40) レーニン『国家と革命』一九一七年、国民文庫、一〇八頁。
- (41) 「中国民族主義とナロードニキ主義」一九一二年七月、レーニン『民族問題に関する批判的覚書』国民文庫所収、一三九頁。
- (42) レーニン、前掲「民族および植民地問題委員会報告」一九九頁。
- (43) 陳独秀「どのようにして軍閥を打倒するか」一九二三年四月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (44) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年二月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (45) (46) 陳独秀「資産者階級の革命と革命的資産階級」一九二三年四月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (47) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年二月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (48) コミンテルン執行委員会「国民党に対する中国共産党の態度に関する決議」一九二三年一月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (49) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年二月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (50) 藤井満洲男『中国共産党五十年略史』東方書店、一九七二年、三三二頁〜三三三頁。
- (51) 国際連盟支那調査外務省準備委員会『支那ニ於ケル共産運動』一九三二年一月、九頁参照。
- (52) スターリン「国際情勢とソ同盟の防衛」一九二七年八月、『中国革命論』一九五三年、国民文庫。
- (53) トロツキー「中国革命論」一九二七年五月、『トロツキー選集』現代思潮社、一九六八年、六八〜九四頁参照。
- (54) 毛沢東は、このことを「第一次大革命の後期には、すべてのものと連合し、闘争を否定したが、土地革命の後期には、すべてのものと連合し、連合を否定した。……この二つの極端な政策は、いずれも党と革命に非常に大きな損失をこうむらせた」(『政策について』一九四〇年十二月、『毛沢東選集』第二巻、外文出版社、一九六八年、東方書店)と総括している。なお、この党内指示は、遺憾ながら竹内実監修の北望社版『毛沢東集』には所収されていない。
- (55) スターリン「中国革命の見通しについて」一九二六年十一月、『中国共産党史資料集』第二巻。
- (56) 胡喬木、前掲『中国共産党の三〇年』二二二〜二三頁。
- (57) 藤井満洲男、前掲『中国共産党五十年略史』五四頁。
- (58) スターリン「国際情勢とソ同盟の防衛」一九二七年八月、『中国革命論』一九五三年、国民文庫。
- (59) 陳独秀「二十七年以来国民運動中所得教訓」『新青年季刊』第四期、一九二四年二月。
- (60) 陳独秀「中国民族運動におけるブルジョアジー」一九二五年一月、『中国共産党史資料集』第二巻。
- (61) 陳独秀「告全党同志書」一九二九年二月一〇日、『中国共産党史資料集』第四巻。
- (62) 中共中央擴大會議「中国共産党と中国国民党との関係に関する決議」一九二五年一月、『中国共産党史資料集』第二巻、一九七一年。
- (63) (64) 「中国の現在の時局と共産党の任務に関する決議」一九二五年一月、同第二巻。
- (65) コミンテルン執行委員会第六回ブレナム「中国問題に関する決議」一九二六年三月一三日、『中国共産党史資料集』第二巻。
- (66) 陳独秀「中国革命勢力を統一する政策と広州事変」一九二六年四月、『中国共産党史資料集』第二巻。
- (67) 陳独秀は、前掲「告全党同志書」(一九二九年二月)で、後に「私は三月二〇日政変後、コミンテルンの報告の中で、……党内合作から党外合

作に改めること、さもなければ、いきおい党は自己独自の政策を實行できず、大衆の信任をえることができないだろう」と述べていたことを明らかにした。これが事実とすると、陳独秀はコミンテルンに対しては、国共分離（党外合作）を主張し、他方、蔣介石など外部、もしくは中共内ではコミンテルンの指導を推進していたことになる。

- (68) 中共中央第二回拡大会議「中央政治報告」一九二六年七月、『中国共産党史資料集』第二巻。
- (69) コミンテルン執行委員会「国民党に対する中国共産党の態度に関する決議」一九二三年一月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (70) スターリン「国際情勢とソ同盟の防衛」一九二七年八月二日、『中国革命論』所収。
- (71) スターリン「中山大学の学生との会談」一九二七年五月二三日、『中国革命論』所収。
- (72) (73) スターリン「中国革命とコミンテルンの任務」一九二七年五月、『中国革命論』所収。
- (74) スターリン、前掲「中山大学の学生との会談」。他にスターリンは「中国革命の諸問題」（一九二七年四月二日）で「革命的国民党、すなわち右派分子のいない国民党、国民党左派と共産党のブロックとしての国民党の手に国内の全権力を集中する政策にとりかえねばならない」とし、四・一二クーデタ後、国民党左派を高く評価し、国内の全権力を国民党左派と中共の二者に集中する政策を打ち出している。
- (75) (76) (77) スターリン「中国革命とコミンテルンの任務」一九二七年五月、『中国革命論』。
- (78) 陳独秀「コミンテルンへの電報」一九二七年六月二五日、『中国共産党史資料集』第三巻、一九七一年。
- (79) (80) 中西功、前掲『中国革命と毛沢東思想』一三九、一四四頁。
- (81) スターリン、前掲「中山大学の学生との会談」。
- (82) (83) 陳独秀「中国の農民問題」一九二三年七月、『中国共産党史資料集』第一巻参照。
- (84) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年二月、『中国共産党史資料集』第一巻。

中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

(85) B・I・シユウォールツ著、石川忠雄等訳『中国共産党史』慶応通信、一九六四年、八九頁。

(86) (一) 中国では、解放と独立を達成するために必然的に社会主義を指向する傾向を有していた。例えば、辛亥革命が単なるブルジョワ革命ではなく、社会主義を展望していることにも示される。レーニンは、このことを「中国のナロードニキにあつては、この戦闘的民主主義のイデオロギーは、第一には、社会主義的夢想、第二には根本的な土地改革の計画、および宣伝と結びついている。……このような主観的社會主義を発生させた」〔民族問題に関する批判的覚書〕「中国民族主義とナロードニキ主義」国民文庫所収、とする。

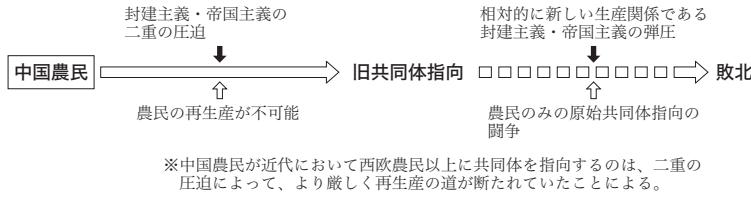
(二) 西欧の農民運動も共同体指向の要素をもっていた。だが、農民のみの運動では社会主義共同体というよりも、旧共同体、原始共同体的なものを指向する。このことに対しては、ルウェーブルの『フランス革命と農民』（柴田三千雄訳、未来社）によれば、①バブーフについては、「『社会的権利』の観念は、おそらく、その歴史発生以来、農村共同体の内部に保持されてきたものであり、これこそ今日の社会主義者達が、社会主義運動の萌芽と見なすべきものである。……バブーフの例はその証拠と思われる。……彼が『社会的権利』の強固な思想を農村共同体から受けついでことは、疑いえない所である。……もつぱら彼の共産主義は、多くの特徴を当時の農村から借用しているのであり、それは未来を予言するというよりは過去をふりかえっている」（同前、三〇〇―三二頁）とする。

②サンキュロットについては以下の通り。「彼らは過去から借用した諸要素をもつて、理想社会を描いていたのである。おそらく、彼らの精神状態の内には、革新的な熱意よりも保守主義や因習の方が強かった」三〇頁。なお、エンゲルス『ドイツ農民戦争』（伊藤新一訳、五二頁、国民文庫）には「空想による共産主義は、大きな民衆動乱のたびに繰り返しあらわれ、やがて、おもむろに近代プロレタリア運動に合流していく」とある。

以上のことを総合して考えてみると、五・四運動以前の農民運動、及び西欧の農民運動は、旧共同体（原始共同体）を指向（各人が各自の意識的に意欲された目的を追求することによって、その歴史をつくる）（エンゲルス著、松村一人訳『フォイエール論』岩波文庫、一九六〇年、六

八頁）が故に、理論的にも新しい生産関係を代表する封建階級、もしくは帝国主義に敗北することになる。  
 あくまでも理論的にはあるが、上記に考察を加えると、付録図のようになる。

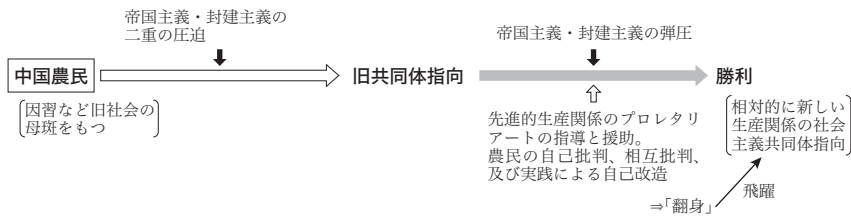
①五・四運動前：



②バブーフなど西欧の農民運動：



③五・四運動以降：



付録図 史的唯物論から見る中国・西欧の農民運動

- (87) 中国農民は、伝統的に秘密結社をつくりつづけてきた。これらは宗教によって結集力をつよめ、自己防衛組織の色合いをもっていた。その結果、中共支持勢力としても組織形成、活動能力は継承した。例えば、毛沢東の三大規律八項注意（これは、太平天国の規律から示唆を受けたといわれている）をみると、「①一切の行動は指揮に従う」（三大規律）は、「四、師長を尊びたつとぶ」（紅槍会入会会規）、「三、暫規を攪乱すべからず」（青幫規）、「令に抗して従わざる者は切る」（紅幫規）という規則の下で動いていた人間にとって受け入れ易かったのではないか。また、「九、難あらば同じくあたるべし」（青幫規）、「三、苦難相共にすること」（紅幫誓約）という規則で鍛えられていたからこそ、毛沢東の長征にも抗日持久戦にも耐えられたのではないか。また、農民協会のはしりを農民自身が創造したことは、秘密結社を組織していた経験からさほど苦もなく、農民協会を創造、発展させることを可能にしたのではないか（幫規は、末光高義『支那の秘密結社と慈善結社』満洲評論社、一九三二年参照）。のみならず中共は多くのことを秘密結社から学んだ。その一つとして「朱德將軍は……：中国共産党の細胞と哥老会や三合会の支部を同一視した」（Jean Chesneaux『Popular Movements and Secret Societies in China 1840-1950』Stanford University Press p. 21）とある。
- (88) 陳独秀「中国国民革命と社会各階級」一九二三年二月、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (89) コミンテルン執行委員会「中国共産党第三回大会に対する指令」一九二三年五月三日、『中国共産党史資料集』第一巻。
- (90) スターリン「臨時革命政府と社会民主党」一九〇五年八月一五日、『ポルシェヴィキ党の建設』国民文庫、一〇二頁。
- (91) スターリン「中国革命の見通しについて」一九二六年一月、『中国共産党史資料集』第二巻。
- (92) 陳独秀「克林德碑」一九一八年一〇月一五日、『独秀文存』巻一、三五九頁〜三六〇頁。
- (93) 陳独秀、前掲「告全党同志書」。
- (94) 陳独秀「論国民政府之北伐」一九二六年七月六日、『論北伐』嚮導叢書第四種、一九二六年六月、二頁。



(95) 黄世見「黄世見書」一九二六年九月二三日、同前『論北伐』、三五頁、三八頁参照。他にも冥飛は陳独秀を批判して①国民政府の北伐は純粋に「軍閥打倒」、「帝國主義打倒」の目的を達成し、国民革命を完成させるものである。②「戦費などのため……労農兵からしほりあげるべきではない」ということは、北方軍閥に国民政府の内部事情を知らせることになり反革命に等しい。③独秀はまるで蒋介石を褒賞した軍閥のように考えている（同前、三頁）。同様に「張人傑書」、「符琇書」も陳独秀の「論国民政府之北伐」を批判している。

(96) 波多野乾一『中国共産党史』第一巻、時事通信社、一三八頁参照。波多野によれば、「農民運動の拡大深化につれ、終にブルジョワジーとの衝突をきたし、最後に国共分裂をみた」（同前、一三九頁）とする。確かに北伐における「農民運動の異常な高まり」によって国民党の存在を脅かすまでに中共が伸長した。そうした状況になって国民党のクーデタが生じたと考えるのは妥当である。

(97) 毛沢東「国民革命与農民運動」一九二六年九月、『毛沢東集』第一巻、北望社、一九七二年、一七五頁。また「革命の勝利は、いつも反革命勢力の弱いところから、さきにはじまり、さきに発展し、さきに勝利する」とある（毛沢東「日本帝國主義に反対する戦術について」一九三五年二月、『中国共産党史資料集』第三巻。なお、これは、北望社版には所収されていない）。

(98) 藤井満洲男、前掲書、五九頁。

(99) (100) 陳独秀「中国共産党五全大会における中央委員会の政治組織報告」一九二七年四月二九日、『中国共産党史資料集』第三巻。「歴史上ブルジョアジーはあらゆる革命を裏切った。……ブルジョアジーはプロレタリア革命に反対するばかりでなく、ブルジョワ民主主義革命をやりとげる能力すらもっていない」（同前、二五頁）と述べていたのである。

(101) 第八回プレナム「中国問題に関する決議」一九二七年五月、『中国共産党史資料集』第三巻。

(102) 陳独秀「コミンテルンへの電報」一九二七年六月一五日、『中国共産党史資料集』第三巻。

(103) 陳独秀「湖南政変と蒋介石討伐」一九二七年六月二〇日、『中国共産党史資料集』第三巻。  
中国共産党総書記時期における陳独秀（菊池）

史資料集』第三巻。

(104) (105) 毛沢東「湖南農民運動考察報告」一九二七年三月、『毛沢東集』第一巻、北望社、二〇八、二二二、二二四頁。なお、毛は同報告の中で「プロレタリアートのヘゲモニー」がやかましく主張されている時期に、それに一切触れていないことには注目しておく必要がある。

(106) 毛沢東「中国社会各階級的分析」一九二六年二月、『毛沢東集』第一巻、一九七二年、一六八頁、一七三頁参照。なお、組織化の面では「自作農、半自作農、半益農、貧農、雇農、及び手工業労働者の五（六？）種類の農民を一つの組織のもとに組織する」（毛沢東「中国農民中各階級的分析及其對於革命的態度」一九二六年一月、『毛沢東集』第一巻、一五九頁）と述べている。

(107) (108) (109) 中西功「中国革命と毛沢東思想」青木書店、一九六九年、一三五、一五四、一五五、一六二頁。

(110) マルクス「経済学批判」『経済学批判序言』国民文庫、一八五九年、一五頁。

(111) (112) 陳独秀、前掲「中国国民革命と社会各階級」。

(113) スターリン「時事問題についての短評」一九二七年七月二八日、『中国革命論』。

(114) (115) トロツキー「中国の農民戦争」一九三三年九月、山西英一訳『トロツキー選集—中国革命論—』現代思想社、一九七〇年、三〇三、三〇六頁。

〔付記〕本稿は元来、手筆であり、パソコン入力などで、院生の玉置文弥、柴田諒平、久保慎一郎三君の助力を受けた。謝意を表したい。